

ある訣別

Prologue

初めて耳にした時から、その音には一条の光が差していた。僕はその光に惹かれ、求め、そしてそれがこの手に掴めない事を知って失望した。

十六年の一年は、まるで透明なガラス張りの箱の中で、出口を求めて足掻き続けるネズミのようである。それでいて、僕にはそれまでの一生で一番幸せな時間でもあった。

大人の目には愚か以外の何物でもなかったとしても。

未だ自己の境界すら見えない僕等の世代では、こうなるしかなかったと、今改めて思う。

未来へと繋がる道を選び取る一年が過ぎ、ポールとミロがそれぞれ声楽とヴァイオリンの専科に転科した。アイオリアは教職に就く道を選び、ウォルトはGCSEで学年最優秀のスコアをとった。考古学を学ぶつもりだという。

僕の未来は、漠然として未だ見えない。

例年よりも暑いと感じた八月が終わり、やってきた九月の空はどんよりと重く曇っていた。ロンドンよりも南のケント州で、肌を感じる気温はロンドンよりも少し冷たく湿っている。機械やエアコンからの廃熱に囲まれたビルの隙間と、この見渡す限りの緑の絨毯の上とでは、空気が違っていて当然なのかもしれない。

クイーンズベリーでの五年生の秋は、その少し引き締まった空気の中、オーケストラの第五学年の仲間達との会合で始まった。第五学年、というのは、僕等が初めて上級生の仲間入りをする学年だ。四年生までは、学校の行事でも、クラブ活動でも、ただ上級生の指示に従って動いていれば良かった。それが五年生になると、一気に何もかもが責任を帯びて来る。スクールで行われる行事は基本的に五年生が企画、運営を行う事となつているし、それは各自が所属するスポーツのチームや、オーケストラのような文科系倶楽部でも変わらない。

かくして、僕等もオーケストラの先輩から正式に『第一期新人勧誘委員』に任命され、これから始まる新人勧誘の計画を練るために集まったのだ。

ほぼ三ヶ月ぶりに集まった五年生の仲間達の顔をみると、成程皆それぞれに成長したのだな、と実感する。紺のブレザーにハウス・カラーのタイという出で立ちが、どこか借り物のよう

でしつくりこなかつた先の二年に比べ、急激に伸びた身長のおかげでそこそこ見栄えがするようになった。

長い休みを挟んで、流石に声変わりをしていない者もいなくなつた。最後まで綺麗なソプラノを残していたミロが、休みに変声を迎えたのだ。ミロは身長も凄いい勢いで伸びていて、去年の今頃はまだゆうに五インチはあつた僕との身長差がもう殆どなくなつていた。

さて、久し振りに集まつた仲間を前に、僕は重大な発表をひとつ行つた。スクール・オーケストラ、三つあるうち一番編成が大きいことから通称大オーケストラと呼ばれてきた僕等のオーケストラは、今年からクイーンズベリ交響楽団と名称を改めることになつたのだ。理由は、音楽専科の方でこれまで選択科目として細々と続いていた管弦楽演習のクラス（このオーケストラが今迄一番小さな編成だつた）を大幅に補強し、新たに授業オーケストラを新設することになり、偶然か故意か、その名称が僕等のオーケストラと重複したからだつた。

百年以上の歴史のある大オーケストラの正式名称を改名させるとは何事かと、OBの先輩方の反対は大変なものだつたらしい。しかし、現役団員には、学校の倶楽部、という実態そのままの語感より、交響楽団という少々背伸びした名称の方が断然受けが良かったので、移行は難なくスムーズに行われた。

名前が格好良くなつたのは歓迎すべき事ではあるけれど、それには多少おまけもついていて。

中身は同じでも、スクール・オーケストラと交響楽団では、

語感から受ける印象が全く違う。そんなわけで、今年は多数の入団者が見込めるはずだと、僕等は勝手に団員から重い期待をかけられていたのだ。

勧誘委員長は、上級生からの指名で僕とトロンボーンのマックスが同票をとり、結局くじ引きで僕が委員長、マックスが副委員長になつた。いつもこの手の事になると競り合うことになるフアゴットのウォルトは、どうやら先に上級生に掛け合つて辞退していたらしい。彼の母親は話聞く限りでは所謂教育ママらしく、オーケストラに力を入れ過ぎたと苦言を言われて、これ以上のめり込むようならスクールに掛け合つて交響楽団を止めさせるか、場合によっては転校も止むを得ないと脅されたところばしていった。

五年生に上がると、同級生達の目の色も変わつて見える。夏の間、塾に行つた者もあれば、家庭教師をつけてほぼ一年分の内容を先取りしてしまつた者もある。学年末のGCSE試験はそれだけ、僕等にとつて重いものであつて、失敗すれば人生の設計が大幅に狂うというのを、僕等も実感としてはともかく知識として理解している。

そんな大事な時期に、クラブの勧誘などにかまけていて良いのか、という視線は勿論あつて、僕もまたそういうあまり好意的でない視線に晒された。成績に余裕があるから遊んでいられるのだらう、という声の裏には、その間に成績が下がつてしまえばいいのに、という思惑も透けて見える。去年までの仲間が、これから競争相手になる、誰もが通過する点ではあるけれど、

新学期早々そのことを思い知らされた感じで少し寂しかった。

オーケストラの内部でいえば、先のマックス、僕、ミロが、あまりそういう意味で緊張感がない。他の寮では、ヴィオラのジュームズ・コリンズ、コントラバスのマーチン・スクージー、ヴァイオリンのジョン・シェパードやフルートのジョンナサン・ブリッジあたりだ。結局、このメンバーが中心になって動くことになり、九月の二週目に企画された見学会を兼ねた合奏練習習に人を呼び込むピラ卷き作戦が始まった。

途中、今年のコンサートマスター兼ソリストでもあるサガ先輩の退学が知らされ、団内が騒然とする騒ぎがあったが、五年生以上本員による直訴のお陰で何とか事無きを得た。

そして、漸く迎えた見学会の木曜日。

勧誘委員長の責務を預かる身としては、如何にも頭の痛いその問題が浮上した。

「確かに、このコンマスは、素人にしては上手いな」

決して大きくはない声でも、誰もがぎょつとして振り返らずにはいられないその言葉が小さな少年から発せられたのは、合奏が終わわり、後片付けが始まった時のことだった。

つい先刻までの興奮と熱気に包まれながらパイ椅子を運んでいた団員達の手が、その一言で凍り付いた。今日の演目は、サガ先輩のソロによるチャイコフスキーの協奏曲第一章で、新人生は勿論、団員も十分に唸らせる出来だったからだ。

サガ先輩のヴァイオリンに文句をつけられる人間など、僕等のオーケストラには居ない。何しろ、入団して初めて楽譜を目にしたような団員も含む素人の集団だ。その中で、五歳からヴァイオリンを弾いているというサガ先輩の音は、いつも際立って美しく、団員の憧れの的だった。

そこに、率直と言えは聞こえが良いが遠慮の欠片もないその言葉が響いたのだ。幸いなことに、サガ先輩はブラウン教官に呼ばれていてその場に居なかつたが、団員達が驚きとともに膨れ上がる敵意を抱いたのは、ヴァイオリンに入団を希望している少年、

ジョシュア・ミラー。経験者だった。

淡い金色のウェーブのかかった髪の中に、意思の強そうな青灰色の瞳。きつちりと襟元で締めた、ハウスカラーの臙脂色にオレンジのストライプのネクタイで、ローズ寮の学生と知れる。

ミロが、鳴りもの入りで連れて来た今年の音楽科の新人生で、専門はピアノだがヴァイオリンも弾ける、という期待の新人だった。

当初、僕はこの少年の姿を見た時に、ミロに少し似ている、と思った。色素が薄いから、というのもあるけれど、それ以上に、物怖じしない感じが入団当時のミロに重なったのだ。

けれど、この彼の遠慮のない一言は、それよりもむしろポールリッジウェイを思わせた。もう何年も前、自信に溢れたボーイ・ソプラノだったポールに初めて会ったときの彼は、こういう物言いをする少年だったからだ。

「うん、でもまだまだ上手くなるよ。サガはね。休み明けて、調整中だし」

のんびりとしたヴィオラのアンドリュウ先輩の声で、僕は我に返った。途端に、こめかみに嫌な汗を感じた。

連れて来た新人生が、団の空気を乱している。その指導は本来僕等五年生がやるべきであって、アンドリュウ先輩の手を煩わせるようなことじゃない。

何とかジョシユアをこの場から連れ出せないか、と考えた時、更に思いもよらなかつたジョシユアの言葉が聞こえた。

「調整中……ソリストなのに、休み中に練習しなかつたの？」

記憶に残っていたある感覚が、その声色に敏感に反応した。

一応、形だけは、悪意のない振りを装っている。けれど、僕はこの声を知っている。昔合唱団に居た頃、ソロでミスをした仲間を笑っていた、別のソリストの声だ。

ソロが欲しいなら、必死で技術を磨け。満足に貰ったソロもこなせないなら、ソリストを降りろ。

それが当たり前だったあの集団にいつも満ちていた、声なき声だった。

何故、この少年は、今日初めて会ったばかりのサガ先輩にこんなにも攻撃的なのだろう？

僕の思考が昔の事を思い出して機能停止をしている間にも、アンドリュウ先輩の取りなしはつづいていた。

「ちょっと、事情があつてね。彼は、先日までソロを降りるつ

もりでいたんだ。でも、僕等がもう一度やつてくられて頼みにいつて、それで戻つて来たんだよ」

普通、ここまで説明されれば、多少腑に落ちなくても口を噤むだろう。反論すれば、サガ先輩だけでなく、サガ先輩の復帰を願った最上級生全員に意見することになるからだ。

しかし、ジョシユアはそんな事には一切構わなかつた。

「何、あの人、そんなに偉いの？ ただこのオーケストラで一番上手いだけで？」

流石に、これには僕も哑然とするしかなかつた。

ここは、全寮制の学校であつて、プレップを終えて入学して来る新人生はヒエラルキーの一番最下層に位置し、上級生の言動には悉く敬意を払うのが当たり前なのだ。

無論、それまで自由に過ごして来た彼等にとつてそれは窮屈なことであろうし、慣れるのに時間がかかるということも分かる。けれど、そのヒエラルキーの最上部に居る最下級生から、これだけ穏やかなとりなしをされても、なお譲らないというのは、もう慣れる、慣れないの範囲を超えている。

事ここに至つて、僕はもう一刻も猶予はならない、と悟つた。近くに居たミロも、流石に顔色を変えてジョシユアの肩を抑え、牽制する様子を見せた。けれど、僕がその決意を行動に移す前に、遂に現団長であるシユラ先輩から雷が落ちた。

「新人生、お前もボーディング・スクールに入ったんなら、上級生への口のきき方くらい弁えろ。他人をとやかく言うのは、それが出来てからだ」

「だからさ、あいつ、本当に、思った事言ってるだけなんだよ。素人にしては、とか言っただけど、結局上手いって褒めてるんだし、別にサガなこと侮辱してるわけじゃないと思うんだけど……」

見学者を返し、ホールを片付を終えてから、僕は緊急に五年生の会議を招集した。集まってきた仲間達の表情は、一様に重く、折角盛況に終わった見学会の成功を祝う雰囲気はなかった。

ミロが集まった仲間の中心で、懸命にジョシユアのための弁解をしている。けれど、それを眺める仲間の視線は、決して優しくはない。

勧誘してきた新人生に関しては、全てが五年生に任ざれている。団の決まり事を教えたり、先輩に対する言葉遣いや態度を注意するのも僕等の役目だ。

だが、今日は初日の上、あまりに非寛大な発言が重なって誰も止める事が出来なかった。最上級生に不愉快な思いをさせたのは、僕等の責任でもある。

現に、僕はあの後、シユア先輩に呼ばれて、念を押されたのだ。「あの新人生をどうすればいいか、お前は分かっているな」と。「いや、そうじゃなくてな、ミロ。本心がどうだったか、って話じゃなくて、それ以前の問題なんだよ」

フルートのジョナサンの言葉を、ヴァイオラのアンソニーが身震いで継いだ。

「シユア先輩、怖かったよね……僕だったら、もう二度と来ません、って気分になるよ」

シユア先輩は大変怖い人であるように後輩からは（もしかすると同輩からも）恐れられているが、実はその眼力のお陰であそこまで厳しい態度に出る事はそうない。そして、その雷に一番こたえていないのが怒られた当の本人らしい、というところが、この問題の最も頭の痛いところだった。

そうになると、新人生に対する連帯責任は誰にあるのか、という話になる。かくして真っ先に槍玉が上がったのがミロだった。

ミロは今年、ヴァイオリンへの団員確保の上に、未来のコンサートマスターとなるヴァイオリン経験者の確保という難しいノルマを与えられている。毎年繰り返されるヴァイオリンパー

トの難題のひとつだ。ところが、ミロは、勧誘活動を初めて僅か数日で、早々に候補者を見つけてきた。音楽科の専科生で、ヴァイオリンも弾けるのに、室内管弦楽団だけでなく交響楽団にも興味があるというのだから、ミロでなくても期待して当然だった。

期待の裏返しは、大きな失望になる。ミロは、期待された方、失望も一身に被ることになった。

僕が最初感じた印象、つまりジョシユアがミロに似ている、という印象は、団員にも共通するものだったらしい。僕はむしろボールに似ていると思いたけれど、ボールとそれほど親しくない他のメンバーにとつては、今日のジョシユアは入団当初、色々と団体行動を乱して周囲を困らせたミロを再び見て

いるような気分にはさせられたのだろうか。誰もが、「お前のような」問題児を、二人も抱えたくない、という本音を隠さずにミロにぶつけてきた。

「なんだかなあ……鼻っ柱が強い奴は、いくら上手くても、あとあと苦労するんだよな。お前は、少少トラブルメーカーでも、あそこまで露骨な気の強さはなかっただろ？ 先輩にはタメ口でも敬意はちゃんと見せてたし」

トロンボーンのマックスが困ったようにそう吹き、その場にいた五年生のほぼ全員が頷いた。唯一頷かなかったのはワイオラのジェームズ・コリンズで、「ミロは、気に入らない先輩には尊敬してるフリも見せなかったよ」と呟いた。

皆から同意を求められたミロは、それでも健気に反論した。「いや、そういうんじゃないよ、……あいつ、かなり耳が肥えてるんだよ。サガのことも、多分、プロのソリストと比べたんだと思うんだ。だから、つい、素人にしては、つて口も滑るし、ブランクがあつたとか言われれば、練習してなかったのか、つて話にもなるし……」

「待てよ、それはいくら何でもないだろう？ 先輩は学生なんだし、専科生でもない。プロと比べる方がおかしいだろう」

ファゴットのウォルトがそう割って入って、これにも全員が頷いた。今度はミロは反論せず、もどかしいような、困ったような表情で黙り込んでいた。

僕は、なんとなく、ミロが考えている事が分かったような気がした。

僕自身の意見を問われれば、それは勿論、ウォルトに賛同する。僕等は素人で、他に山ほどするべき事がある中、時間をやりくりしてオーケストラに参加している。それを、生活のほぼ全てを音楽に費やせるプロと比べられたのではたまらない。

けれど、ミロにはそういう理屈が通用しない、というの分かるのだ。それは、この二年間ミロを身近に見て来て、理解できないながらも学んだ事だった。

プロと差があるのは厳然とした事実なのに、それを指摘するのが何故いけないのか、もつといえは、条件に厳しい差がある中で両者を比較するのは、相手をそれだけ認めているからだ、と、ミロの思考回路では変換される。

専科生で耳の肥えたジョシユアが、条件つきでもサガを褒めた、そのことに喜びこそすれ、ミロは多分反発など感ぜなかつたのだろう。だから、この団員達の過敏な反応が、ミロにはよく分からないのだ。

このミロの感覚のずれは、実は、最初から僕等とミロの間に横たわっていたものだった。

『だからさ、絶対にあいつ凄いつて！』

ミロがジョシユアを捕まえてきたとき、ミロはひどく興奮しながら、ジョシユアが如何に優れた「ピアニスト」であるかを訴えた。

ヴァイオリンの入団者を探しているのに、ピアノが弾けたかどうかというのではない。拍子抜けた仲間達に、あんなピアノ

ノが弾けるのだから、ヴァイオリンだって絶対弾ける、あいつがまともに弾けないものをプライドにかけても弾けるなどと言うものか、とミロは言い切り、なんとなくその場は皆納得させられてしまった。けれど、ミロがジョシユアに見いだしたものは、ヴァイオリンを弾ける腕ではなく、それを弾こうとする魂だったのだ。

よくよく冷静に考えてみれば、今の対立も結局そこに帰着する。ミロはジョシユアの言葉にプロの演奏家を目指す者としての魂を見ているけれど、僕等は言葉そのものの意味や、それを使う時にどれだけ周囲に気を配ったか、などの団体の中の個人に必要な資質を見ている。ミロはあのジョシユアが弾くヴァイオリンなら、と想像するけれど、僕を含め、ここに居るミロ以外の仲間達は、彼のヴァイオリンや言動をきいて初めて、ジョシユアの人となりを判断するだろう。

しかも、よりによって、ピアノ、か……。

一実を言うと僕は、最初からそのことに少しひっかかりを感じていた。

ピアノというのは、一人で弾ける楽器だ。勿論、ヴァイオリンだろうがトランペットだろうが一人で演奏は可能だけれど、圧倒的に一本で演奏できる曲が少ない。一度に出せる音がヴァイオリンなら最大四音、管楽器では一音しかないのだから、全部合わせて十音、うまくすればそれ以上の音を出せるピアノに比べると、どうしても出来る事が限られてしまうからだ。

僕自身は、ピアノを弾くけれど、ソロよりアンサンブルが好

きな人間だからあまりピアノの万能性に興味はない。でも、専科でピアノを専攻している学生といったら、やっぱりピアノ至上主義、もしくは他人の手など借りずとも自分一人の音楽をやる人間なのじゃないだろうか。そうして、そういう楽器を選ぶという事自体に、結局最後は自分の我を通したい、という傾向が関与しているのじゃないか、と、思うのだ。

無論、全てのピアノリストがそうだと言っているわけではないのだけれど……。

まだたった十三歳で、そこまでミロに感銘を与えるピアノが弾けるといふことは、それなりに自分の音楽にプライドを持っているのだろう。それは悪いことではないけれど、そこを死守しようとするあまり、周囲に対して攻撃的になる例はこれまで合唱団で散々見て来たから、多少その点が気になったのだ。

そして、現状は、どうやらそれが杞憂ではなかった、という事を示しているように、僕には見える。

これは、いくらミロが思い入れていても、なかなか難しいな、と思つたときに、ふと、何かが胸にひっかかった。

ミロが、ジョシユアを手放して褒める。こんな仲間達から難しい顔をされているのに、自分一人になつても必死に庇う。そのことに、自分が一瞬間な感じを覚えることに気付いたのだ。ちくり、と胸を刺すような、冷たい感じ。僕は、それが、僕のジョシユアに対する嫉妬であることに気付いて、愕然とした。二歳も年下の、まだスクールに入ったばかりで右も左も分か

らずに緊張している新人生に、自分が嫉妬している？

ミロは、僕のピアノにも敬意を払ってつけているし、好きだとも言うてくれる。だけど、あんなに興奮して『凄い』と連発されたことはないし、第一ミロが執着しているのは僕の変声前の声であつて、ピアノの方は選択音楽の時間でペアを組んでいた時、時折こちらのピアノなど聞いてないのではないかと、思うようなテンポで走り出してしまつて困つたくらいだから、多分それほど興味はないのだろう。

ピアノという楽器にあまり興味がないかと思つていたけれど、そうじゃない。ミロは、ただ一度聴いただけのジョシユアのピアノにこんなにも執着している。そのことに嫉妬しているのだと漸く気付いて、僕は天を仰ぎたい気持ちになつた。

こんな片寄つたスタンスでは、ジョシユアの事をとやかく言うことは出来ないじゃないか……！

シユラ先輩に釘をさされた事もあり、ジョシユアに対しては多少厳しい処置もやむを得ない、と思つていたのが、それで一気に白紙撤回された。

上級生の権力で団内の和を守ることを要求するのは、最後の手段ということにしよう。

幸い、シユラ先輩は「すぐに黙らせろ」とは言わなかつた。我々五年生に、任せてくれたのだから、まだ少し猶予はある、と思つたのだ。

「ミロ、君には、彼の耳が肥えていると信じる根拠があるのか？ それとも、ただ専科だからそうだと信じているだけか？」

問題をクリアにするために、また、スミス寮以外でこのことを知らない仲間達のために、敢えて僕がそう質問すると、皆は意外な顔をして僕を見た。今はそんな事を話している場合じゃないだろう、と言いたげだ。

果たして、ミロはスミス寮の食堂で見た通りの情熱を持つて言い切つた。

「それは保証する！ 俺、あいつのピアノ、聴いたんだ。……凄かった。あいつ、音楽に対しては本当に真剣なんだよ。絶対妥協しない……そんな気迫があつた。もつとも、俺の耳が信じられないと言われたら仕方ないけど……」

ミロの情熱的なトークというのは何故か不思議な力があつて、そうなのか、と理屈抜きで思わせてしまふ何かがある。このときも、皆そのミロの情熱に圧された。

「じゃ、なんだ、うまくすれば、シオン先輩並みの厳しさと、サガ先輩並みのテクのある立派なコン・マスになる、つてことか……」

コントラバスのマイケルがそう呟くと、皆、一様に、疲れた溜息をつき、無言でそれを認めた。もしミロの話が本当なら、ジョシユアは願つてもない未来のコンサートマスター候補ということになる。——けれど、コンサートマスターは、技術や熱意だけではどうにもならないものを要求される。人を惹き付けよう力、信頼される美質だ。

果たして、五年後のジョシユアにそれがあるか。でもさ、専科で、ピアノ専門、だろ？ 本当に五年続くか怪し

いぜ？」

「ずつと黙つて話を聞いていたヴァイオリンのハリー・メイ
フオードが、初めて口を挟んだ。

「最終学年はただでさえ忙しいのに、専門と違つて楽譜だ。途中
で二足の草鞋を放り出してやめちまう可能性だつてあるかも」

「ジョシユアは、こと音楽に関しては、そんな無責任なこととは
しなないと思うけどな……」

「バカ、十三の子供が何言つたつて、五年後も律儀にそれ守つ
てるとは限らないだろ」

ウォルトがこつんとミロの頭を小突き、それで僕等の意見は
大体出揃つた。

「……で、どうするよ、委員長？」

マックスが困つたように僕の顔を見て、決断を促した。ジョ
シユアは、今日の練習後に、交響楽団に仮入団届を提出してい
る。つまり、団員として、団の伝統に則り上級生に対する礼儀
を叩き込む、というのでも可能だ。

でも、僕には、どのみちジョシユアがそのようなものに屈す
るとは思えなかつた。あのシユラ先輩の叱責でさえこたえな
かつたのに、まだ経験の浅い我々がどうして言う事をきかせら
れるだらう？

僕は深く息を吸い込み、全員の顔を見渡して言った。

「僕は、ミロの耳は信じるに値すると思う。引き続き、彼
が正式の入団届を出してくれるよう、積極的に働きかけていこ
う。同時に、何とかもう一人経験者を確保するつもりで、皆頑

張つて欲しい。それからミロは、少しジョシユアに張り付いて、
彼の言動を見張つてくれ。彼が他の新入生を怖がらせると困る
し、教育するにも、相手を知らなければ難しいからな」

「で、そいつ、本当に交響楽団に入るの？」

三日後、日曜日。

何時もの通り礼拝堂でのミサが終わつた後、後片付けをして
いた僕にボールが団員勧誘の首尾を尋ねてきた。

僕が所属しているもうひとつの団体、この教会聖歌隊でも
勿論勧誘活動は始まつていて、この秋から漸く正規の練習メ
ニューに復帰したボールも積極的に活動をしている。僕の方は
交響楽団で勧誘委員長になつてしまったことを理由に、勧誘メ
ンバーから外させてもらつてはいるが、合唱に興味がありそう
な子がいれば紹介する、という約束になつていた。

現時点で、管弦楽団に仮入団登録をした新入生はヴァイオリ
ン希望者が五人、チェロが一人、フルート、オーボエ、クラリ
ネットに各一人。

急務はヴァイオラとコントラバスの例年に等しく希望者ゼロの
状態の改善と、金管楽器。実は、僕が受け持つパーカッション
も今年は何んとか一人欲しいところだ。

ヴァイオリンはあと一人経験者が欲しい、という話をしたら、
逆に一人はもう来たのかと聞かれ、ジョシユアの話になつた。
「まだわからないよ。何しろ、専科生だから、普通なら迷わず

室内に行くだろう。何故交響楽団にも興味を持ったのか不思議なくらいだ」

「だってピアノ科なんだろう？ 室内管弦楽団は音楽科の学生で固められたオーケストラだ。ソリストを自指しているような人間じゃないオーケストラで、自分の専門でない楽器を弾くのは簡単じゃないし、だったら交響楽団で、というのは十分有り得ると思うけど？」

「まあ、それは分かるけど……それにしても、皆結構嫌がるものだけだね。耳が悪くなる、とかいって」

まだ楽器を持って一、二年、といったメンバーも多い交響楽団は、専科が固めている室内管弦楽団に比べると、どうしても音程が甘い。プロを自指している人間にとつて、そんな音程の甘さに慣れてしまう事は致命的だ。

「でもピアノだからさ。少々音程甘くなつたつて、自分で音程決めるわけじゃないし。目標はピアノリスト、でもオーケストラも齧つておいて、そのうち期が熟したらあわよくば指揮者に、つて結構野心家なのかも知れないよ」

ポールはシニカルに笑つて、僕はそういうの嫌いじゃないけどね、と付け加えた。

「しかも、サガ先輩に喧嘩売つたつて、よっぽどの馬鹿か大物か、どつちかだろう？」

「……なんだか、随分楽しそうだな」

「まあね。馬鹿には用はないけど、もし本気で先輩の事をそんな風に言つたんなら、見込みはあると思うな。この間、ロバー

ト・ホールの前で先輩の音を聴いたけど、まだ改善の余地はかなりある。それこそ、僕は交響楽団の音に耳が慣れてないからね、多分、ルーファス達が崇拝するほど先輩が凄いととは思つてない。確かに、専科でもないのに良く弾くなあ、とは思うけど」

つまり、「素人にしては」よく弾く、というわけだ。僕は、そのポールの言葉に今更ながら衝撃を受けた。確かに、僕もまた、いつの間にか交響楽団の音に慣れてしまつていたのかも知れない。

「もし交響楽団から追い出すなら、ウチで貰おうかな。ジョシユア、だっけ？ 合唱に興味あれば、だけどね」

「いや、追い出しはしないよ、勿論」

僕は慌ててそう返事した。急に、木曜日一人でジョシユアを庇つたミロが一番止しかつたように感じられて、ミロに申し訳なく思つた。

僕がオルガンの片付をする間、ポールは、持つて来た手提げ鞆から分厚いファイルを取り出し、今日新しく渡された楽譜を綴じ込んでいた。その少し俯いた横顔が、矢張り少しジョシユアと似ている、と思つた。髪の色こそ違ふけれど、瞳は同じ青灰色だし、何よりその隙のない感じが似ているのだ。

思わず、深く考えもせずに、僕は一言呟いてしまった。「ジョシユアつて、少し君に似てるんだ」と。

途端にポールは顔を上げ、少し眉を顰めた。

「僕は、そいつよりはよほど言葉を選ぶことを知つてるつもりだけど？ 何でもかんでも思つた事をぶちまけて、いたずらに

周囲の反感を買うなんてのは、ばかばかしいよ」

「ああ、ごめん、そういう意味じゃないんだ。なんていうか……音楽に対する敵しい姿勢が、似ているかな。と。言いたい事をはっきり言う、という意味では、むしろ昔初めて会った頃の君に近いかな。もう八年近く前のことになるか……」

「よく覚えてるなあ、そんな事」

ポールは呆れたようにそう言つて、それから、多少自嘲気味に、まあ無理もないかもね、と呟いた。

「あのころの僕はすっかり天狗になつてたからね。天才ボーイソプラノ、とか言われて……でも、僕はその後結構痛い目をみたから。そいつは、幸か不幸か、まだそういう目に遭つた事がないんだらう」

「ぼちん、とバインダーファイルの爪を閉じて、ポールはふつと息を吐いた。

「……そいつ、ジョシユアだっけ？　まあ、そういうとこ、不器用つていうか、甘やかされて育つたみたいな感じだけど、実際専科の人間なんて本心はみんなそんなもんだと思うよ。わざわざ口に出して言うかどうかはともかく。こないだ声楽科の連中と色々話してきたけど、まあ、似たような匂いを感じた。プロを本気で目指したいなら、そのくらいの気概がないとやつていけないしね」

僕は、ポールがなんだか昔の話ではなく今現在の話をしているような気がして、ポールの横顔を凝視した。声楽科の学生と話した？　何故？

「声楽科の人と話したつて……」

そう思わず声に出すと、ポールは僕の顔を見て、唇の端を少し持ち上げた。

「実は、来年の五月、声楽科の転科試験を受けることにしたんだ。……やつぱり、僕は、一生歌を歌つていきたいから」

ジョシユアの扱いについて、ミロと相談しなければ、と気になりつつ、何となくお互いに時間がとれずに、火曜日がやってきた。

相談といつても何を言えばいいのか、実のところ、あまり僕自身分かつていなかった、ということもある。

日曜日のポールの告白は、僕に心臓を突き飛ばされたような衝撃を与えた。ポールが専科に転科する。はつきり言つて専科以上の実績のあるポールだし、受ければ間違いないくらい格だらう。

「ルーファス、君だつてその可能性を考えていたから、クインズベリに来たんだらう？」と笑いながら言われて、返す言葉もなかった。

ポールが指摘した通り、僕は入学時になるべく将来の選択肢の広い学校を選んだつもりだった。実は僕は兄同様、生まれた直後に父の母校でもある有名なイートンのハウス・リストに名前を登録してあつて、父はすつかり僕をイートンに入れるつもりになつていたので。でも僕は、兄が根強いイートンの階級社会に四苦八苦しているのを見るにつけ、もつと自由な、あわよ

くば音楽が好きならだけ学べる学校に行きたい、と願ひ父に反抗した。滅多に両親に反抗したことなかつた僕だから、三日三晩に及ぶ話し合いの後、父は漸く、クイーンズベリーへの願書を取り寄せてくれたのだ。

そんなわけで、僕はロンドンを離れ、無事ケント州にあるこのクイーンズベリーに入学した。が、結局、今に至るまで、この学校の転料制度を使ってピアノを真剣に学ぶつもりがあるかどうか、という命題に答えを出せていない。

ポールは既に転料に向けて情報を集め始めていて、何度も専科の教授や学生達に話を聞いていた。そのポールからの、確信をついた言葉。

「専科の人間なんて本心はみんなそんなものだと思つよ。それくらいは大概がないとやつていけないしね」

僕は、そのポールの言葉を正しいと思つた。理屈じゃない。本気でしるべきを削る人間というのは、そういうものだ、と、間近に見て知つていたからだ。

僕の中には、確かにピアノばかり弾いて生きていけたら、と思つて自分がいて、それは自分もそういう人間の一人に混じつて精進すべきだ、と主張する。でも、もう一方では、普通科で趣味として音楽を楽しむ僕がいて、そんな剣呑な空気の途中でどんな善いものが生まれてくるというのか、と反論する。

どちらも僕だから、どちらの気持ちもいい分分かる。でも、交響楽団は、間違ひなく後者の立場だった。

ジョシユアが交響楽団に受け入れられるには、ジョシユアか、

団員の意識か、その両方が大々的な意識の変革をしなくてはならないだろう。

迷つているうちにも時間は容赦なく過ぎ、仮入団の新生活でも練習に顔を出し始め、楽器の持ち方や管理の方法を学び始めていた。勿論その必要のない者もいるけれど、最初に基礎を確認しておく、という団の伝統から、全員がこの時期は初心者と同じ手順を踏むことになつてゐる。

そこでこつがなく仮入団者を交えた練習を終えたその夜、それまで焼つていた火種がついに爆発した。

夕食後、話がある、と部屋に乗り込んできたウォルトが、ジョシユアの口をなんとかしら、とミロの胸倉を掴む勢いで迫つたのだ。

「だから！ あれを悪意がないなんて取るのはお前くらいのもんだつ！」

パンツ、と凄い音がした。ウォルトがミロの机に手を叩き付けた音だ。ミロは目を大きく見開いて、そのウォルトの剣幕に体を固くしていた。

普段冷静なウォルトがここまで怒つたのには理由がある。彼が人間的に尊敬する、下級第六学年のファゴット奏者マーク・トムソン先輩にジョシユアが練習についての口を挿み、そのことで自信喪失したマーク先輩が、退団をほめめかす発言をしたのだ。

六年生にもなれば、学業と音楽の両立は一段と難しくなる。プライベートで楽器を学んでいる殆どの学生が、レッスンを止

めるか、精々気晴らしにたまに取り出す程度にしか楽器を触らなくなるのもこの頃からだ。その一方で、オーケストラに所属する学生は、学年が上がるにつれソロが多くなり負担が大きくなる。初心者で入団し、技術的にはウォルトに及ばないマーク先輩が、専科生であるジョシユアの辛辣なコメントで罪悪感を感じ、ソロをウォルトに譲る事を考えたとしても不思議はなかった。

相手の自信を根こそぎ薙ぎ払うようなものはアドバイスとは言えない、悪意があるとしか思えない、とウォルトは怒鳴り、ミロは表情を固くしつつも反論した。それはある意味理にかなった反論だったが、既に感情に火がついているウォルトを納得させるのではなく、逆にウォルト本人の中に燃つていたらしい不満をも同時に吹き出させた。

「お前に何がわかるっ!! 成續たつていい。楽強たつて弾ける。絶対音感だつて、馬鹿みたいな記憶力だつて——しよせんお前にだつて俺達普通の人間が。どんだけ苦勞して楽強吹いてるかなんかわかりやしないだろうがっ!!」

その瞬間凍り付いたミロの表情を、僕は忘れない。唇を噛み締めたまま、ミロはウォルトを目詰めて微動だにしなかつた。奔放な性格と、入学当時に起こしたトラブルの数々のお陰であまりそのように見られる事はないけれど、確かにミロは、そう苦もなく何でも出来る学生だつた。

ミロに、悪い事をした。

僕は、その剣呑な空気の中で唇を咬んだ。

僕の対処のまずさが、結局ミロ一人を矢面に立たせる事になってしまった、と思つたのだ。

ウォルトが指摘するまでもなく、ミロはこと音楽にかけて、精神的にも技術的にも普通科らしいところは全くなかつた。ミロもジョシユアも、ヴァイオリンの技術力だけでなく、完成度を目指す厳しさが、他の団員とは掛け離れている。それは最早趣味で楽しむレベルではなく、むしろ職業奏家家のそれに近い。そしてそれは、他の団員の目から見れば、ただ弾ける者の余裕と見えてしまうのだということを、僕はこのウォルトの一言で漸く悟つたのだ。

そんなミロに、ジョシユアと団の緩衝役など出来ないことは、少し考えれば当たり前のことだつたのに……。

僕はこの問題の根の深さを知り、自分が新人生の勧誘を仕切る身として、間違つた決断を下していた事を悟つた。

わざわざ交響楽団で煩い事を言わずとも、室内に行けば好きなだけ良い音楽を追求出来る。ジョシユアがミロに懐いているのなら、二人で団を離ればいい。

近い未来に、団員達がそんな目を彼等に向けるようになったら、どうすれば良いのだろうか？

ミロは傷付き、これまで懸命に努力を見せないようにしてきたウォルト自身も傷付いた。明日になれば、ウォルトも少し冷静になるだろうが、思いがけず露呈した不満の種は、ミロがコンサートマスターになる二年後まで燃り続けるだろう。

翌日、ミロは一日姿を見せず、ウォルトも顔をしかめたまま

だった。僕は、前日のミロの憔悴した姿を思い、胃の痛い思いをしながら、最早打てる手はない、と覚悟を決めていた。

木曜日に、ジョシユアと話をして、他の団員に対する彼の厳しすぎる評価を封印するか、それとも交響楽団を去るか、二つに一つを選ばせるしかない、と。

事態がここまで悪化する前であれば、ジョシユアの厳しい言葉を完全に封じるまでもなくとも、言い方を変えれば団員に受け入れられたかも知れない。実際、ミロはそうするようジョシユアに働きかけてきたはずだったが、ジョシユアは一向にそんな忠告に耳を貸す様子もなく、昨日の事件が起きた。

団員達は、最早どんなにオブラートにくるまれた表現であろうと、ジョシユアの意図するところとその中に含まれた悪意のない侮蔑を敏感に嗅ぎ取り、煩わしく感じるだろう。

だから、ジョシユアには一切、他人に対する評価や意見を口にするのは謹んでもらう。それが出来なければ、退団させる。

それは、突き詰めて言えば、交響楽団は趣味の人間の集まりなのだから煩く騒いで団の和を乱すな、という主張にはかならず、僕は結局そこには落ち着かなかつた結論に自分自身で失望した。

趣味でやっているものだって、もつと良いもの、もつと高いレベルを目指す事は可能なはずだ。そのために、ジョシユアやミロのような厳しい目を持つ人間の意見は、もつと有効に活用できたはずなのに……。

気の進まない通告の文面を考えて、僕が宿題のレポートに集中できないでいた時のことだった。一日姿の見えなかつたミロが、消灯間際に部屋に駆け込んできて、「カミュ、話があるんだけど」と顔を輝かせた。

それは、昨夜のミロとは別人のよき笑顔で、僕はその迫力にのまれて、今日こそきちんと睡眠をとらなければ、と思つていたのについて承知してしまつた。

「新人生入宿をやりようと思うんだ！ 新人生と五年生は強制参加 そのほかは自由参加で、ロバートホールの八角堂に泊まつて、強化練習！」

アイオリアが寝入つてから、いつもの通り、僕のベッドの上でひそひそ話をする。声を抑える事ももどかしげなミロのその言葉に、僕は一体何事か、と思つた。

新人生入宿？ しかもロバートホールの八角堂に寝袋を持ち込んで泊まる？！

落ち着いて聞けば、目的は新人生とジョシユアとの垣根を少しでも減らす事だという。その上で夜のレクリエーションでジョシユアにヴァイオリンとピアノを弾かせ、冷やかにやつてきた上級生達にもジョシユアの実力を知ってもらい、ただ生意気な新人生というだけではないと分かつてもらおう、という計画だ。

そこにはしつかり僕もピアノで手伝われる算段が出来ていた。「ジョシユアと連弾で」という条件つきで、だ。

ミロは既に会場確保から監督を頼むブラウン教授への打診、

管楽器のトレーナーの手配まで済ませていた。これだけの事を、誰の助けも借りずに、たった一日でやってしまったのだ。

しかも、前日あれほど激しい言い争いをしたウォルトにも、既に計画を話し、ファゴットのトレーナーを餌に仲直りをしてきたという。

僕は暫く、声も出せずに呆然としていた。

今日一日、僕は最早ジョシユアを押しさえつける以外に解決の道はないと思ひ込んでいた。

けれど、ミロは、その間に別の方法を考え、それを実行に移し、あまつさえ昨日の喧嘩のフォローまで済ませてしまったのだ。

一番ジョシユアに近かつたはずのミロが、激しい怒りを見せたウォルトや他の仲間達の心を汲んで、皆が納得出来る結果になるよう努力している。

去年迄だったら、どうして皆分からないのだ、と焦れているだけだったミロが……

僕は、その彼の成長を嬉しく思うと共に、胸に切られるような痛みを感じた。

僕にも、どちらの立場も理解できた。それなのに、僕にはその道は見つけられなかった。一度こうして示されてみれば、その道はすぐ僕の足下から続いていたのに。

小さい頃から、頭が良い、と言われてきた。

よく気が利く、どんな時にも冷静で、判断は的確。オリジナリティもある、優秀な学生だと、きまつて学校からの通知には

そう書かれていた。

親も、普段口に出しては言わないけれど、そう思っている事は知っていた。ある日、母は僕にこう言った。

「ルーファスは、頭も良いけど、ただ勉強が出来るだけじゃない。ちゃんと綺麗なものを感じる感性があるし、独創的な発想も出来る。それは、決して誰にでも与えられた能力ではないわ。だから、あなたはそれを社会に還元する人間になりなさい」

僕は、いつの間にか、自分でも、自分がそんな特別な立場にある人間なんだと思ひ込んでいた。

クイーンズベリで、ミロに出会って、僕のそんな自惚れは薄い氷のように砕け散った。

僕の知る世界は、僕を中心に全方向に広がっていると思っていたのに、ミロは、僕のすぐ隣に僕からは全く見えない、広大な世界が広がっていることを教えてくれたのだ。

僕にとつて最善の道が辿り着く頂点は、その僕の隣の世界では、高くそびえ立つ理想の山の中腹にも届かない。

どんなに足掻いても、僕がその見えない境界を超えて、自分の足でその理想の道を歩む事は叶わない。

ミロが彼の世界から、その道を示してくれたとき初めて、それまで僕の目に映らなかつた色鮮やかな世界が見えるのだ。

僕は、その世界の純粋な美しさに、いつも泣きたいよつな感動を覚える……けれどそれは、同時に、自分が如何に凡庸で、ミロがどれほどの天賦の才に恵まれているのかを証すものには

かならなかつた。

僕も、ウォルトと同じだ。

ミロに対する感情は、ただ善いものばかりじゃない。

その夜、話し疲れて満足したらしいミロは僕のベッドの上で寝息を立て始め、僕はミロのベッドへの移動を全儀なくされた。

二

「新人生、見送者は前の方に座つて！ 早い者勝ち！」

「こんな高待遇は今日迄だけぞ！ ほら、座つた、座つた」

ミロとジョン・シェパードズのヴァイオリン二人組が楽譜をメガホン型に丸めてよわばる声で、遠慮がちに辺りを眺め回している三年生の頭上に降り掛かる。既に借入団を済ませている面々を上回る新顔がいて、外回りで人をかき集めてきたマックスやマーチン達も嬉しそうだ。

毎年、九月の第三週目の木曜日は、新人生歓迎会を行う事になつてゐる。練習を一日潰して、各パートの最上級生によるミニ・コンサートが開かれるのだ。新人生は上級生が用意したテールの最前列に座り、クッキーやチョコレート等のお茶菓子をつまみ、紅茶を飲みながら、先輩の演奏に耳を傾ける。演奏会終了後、それぞれのパートごとに固まつて懇親会を開き、そこ

で新人生は質問したり、入団届を提出したりすることになる。

つまり、これまで三週間続けてきた勧誘活動の総仕上げに相当するのだが、実際のところ、僕等五年生の役目はこの会場へ人を連れてきたところでほぼ終わる。ここから先は、最上級生がパートの威信を賭けて、「あの先輩かつこいい」とか「あんな風にあの楽器を演奏してみたい」と思わせる演奏を繰り広げる、文字通りの下級生争奪戦に突入するので。

ここで模範演奏をする上級生の心理といえは、あの鷹揚なスチュアート先輩（コントラバス）をして、「今日ばかりはいつもこいつも敵に見える！」と言わしめた、という逸話が残つてゐるほどだが、今年は幸いにして既に借入団生がほどよくそれぞれのパートにばらけてゐるので、それほどシビアな緊張感はない。とはいえ、もともとソロという形態に慣れていないパートの人間には手に汗握る経験には違ひなく、ホルンやチューバあたりの席ではいくつか緊張した面持ちも見られた。

ふと、ヴァイオラの席を見ると、本日模範演奏をすると思われるアンドリュウ先輩が、にこにこ舞台を見詰めていた。

……あれ？

一番青くなつていても不思議はないアンドリュウ先輩が、隣に座つたベンジャミンと、楽しそうに話していた。しかも、よく見れば、手元に楽器ケースがない。

慌てて、ポケットにねじ込んでいた今日のプログラムを取り出した。

一、アンダーソン／トランペット吹きの子守唄

- 二、アンダーソン／クラリネット・キャンディ
 三、ウェバー／狩りの合鳴
 四、バッハ／グノー／アヴェ・マリア
 五、モンテイ／チャルダッシュ
 六、サン＝サーンス／ファゴット・ソナタ（一、三、四楽章）
 七、サン＝サーンス／オーボエ・ソナタ（二楽章）
 八、チャイコフスキー／アンダンテ・カンタービレ
 九、ヘンデル／オン・ブラ・マイ・フ
 十、バッハ／無伴奏チェロ組曲
 十一、ボツテシーニ／グラン・デュオ・ソナタ
 十二、チャイコフスキー／ヴァイオリン協奏曲（三楽章）
 ヴィオラは十一番、コントラバスと一緒にデュエットをすることになっている。コントラバスの最上級生はアイオロス先輩一人だから他に選択の余地がないとして、ヴィオラの最上級生はアンドリュー先輩とオリヴァー・ラスキン先輩。オリヴァー先輩がやるのかと思えば、こちらも何やら興奮した様子でヴィオラの下級生と話し込んでいた。
- 司会を取り仕切るマックスが、手を一回打って聴衆を黙らせ、開会を告げた。
- 「ネー、では、これより、クイーンズベリ交響楽団恒例の新人生歓迎演奏会、各パートの代表者によるミニ・リサイタルを開催致します。制限時間は各パート十分、時間内ならパートの宣伝やパフォーマンスマスもアリです。ちなみに、やり直しは三回までオーケーです」

「新人生は声を上げて笑ったが、このやり直しの規則は大切であって、毎年、プログラム一番のパートはこの規則の世話になっている。矢張り、一番というのは緊張するものだからだ。」

「では、プログラム一番、トランペット吹きの子守唄をどうぞ」
 トランペット・パートは下級第六学年のダン・ウォルター先輩がピアノが得意なので、トランペット・パート同士のペアで演奏をするらしい。ソリストは現在のトップ、エイミー・フオード先輩だ。

ラッパ吹きには珍しく穏やかな人柄で人望厚いエイミー先輩は、矢張りというかお約束通りというか、大真面目に最初の出だしの音をひっくり返らせて早速三回のやり直しを使い切った。音が出てからは、持ち前の甘い音色で聴衆を魅了。同じルロイ・アンダーソンでも、「トランペット吹きの休日」の方になかったのは、正しい選択だろう。

続くクラリネット・パートはクラリネットの五年生以上全員で同じくルロイ・アンダーソンの「クラリネット・キャンディ」を披露した。普段は減多に使わないバス・クラリネットも総動員しての大所帯だ。新人生は勿論、四年生の中にもあんな大きなクラリネットを見たのは初めてだという人間がいて、始まるまでの数分間会場は少しざわめきに包まれた。

ホルンパートは、毎年恒例の四重奏。曲はウェバーの「魔弾の射手」をアレンジしたものだ。彼等がソロを披露したのを僕は見た事がない。先輩も見た事が無いと言っていたから、最早伝統なのかも知れない。彼等も、心臓に毛が生えていない、

という意味でヴィオラに近いメンタリテイがあるから、せめて四人一組で舞台上がろう、という作戦なのだろう(ちなみにここでもやり直し三回を使い切った)。

同じ四人一組でも、次のフルートパートは余裕たっぷりだ。バッハの平均律第一番にグノーが美しい旋律をつけた、有名なアヴェ・マリア。旋律に一人、あとはベースノートとアルペジオを全部フルートでやるという編曲で、フルートの柔らかい音色がこの曲によく合っていた。トップのウィリアム・ヘイズ先輩は、ヘイズ観光の社長の御曹司で、愛器はパウエル・ゴールド・フルート14K。プロも使用するこの楽器は、甘くオーケストラにも負けない強い音が出せる名器だが、勿論値段も張る。楽器に金をかける事に関しては、殆ど毎年楽器を買い替えているマックスといひ勝負だ(勿論、所有楽器の最高価格はタンクトツでサガ先輩のアマティだろう)。

その次は、僕のパートの「チャルダッシュ」。パーカッションパートは様々な打楽器の集合体だが、殆どの楽器は音階を持たない。そういう事情で、オーケストラに憧れて入って来る新入生に受ける選曲というのは本当に難しい。それで、苦肉の策として、唯一音階が出せるマリンバ(木琴)を軸に編曲もの、というパターンになる。

マリンバ用の編曲というのは色々あるし、特に四本のマレット(バチ)を使うものなどは見栄えもするのでこういう機会にうってつけたが、普段マルチプレイヤーとして様々な楽器を演奏させられる人間がマリンバだけをそんなに練習する事はな

い。そんなわけで、毎年最上級生はこの演奏会のために必死でマリンバを練習する羽目になる。僕が最上学年になった時には、ピアノで誤摩化してやろうか、と密かに考えているが。

フルートのアヴェ・マリアはともかく、それ以外は元気のよい曲が続いた後で、ファゴットの順番になった。

ファゴットとオーボエは、続けてサン＝サーンスのソナタを選曲した。これは偶然、というよりはかなり必然の度合いが濃い。どちらもソロ曲に恵まれず、殆ど選択肢がないからだ。そして、どちらも、僕にピアノ伴奏を頼んできた。

ファゴットソナタの方は、ピアノの優しいアルペジオで始まる。少し、ブラームスを思わせるダイナミクスのある曲だ。

トップのトニー・マクファーレン先輩は、プライマリの三年からファゴットを吹いていた名手。今回の演奏会の演目で、折角だからファゴット・ソロの多い曲にしようかと最上級生が画策したのに、ブラームスを吹ければそれで良い、と皆断ってしまった。けれど、先輩の音は艶やかで暖かみがあつて、こうしてソロで皆に聴かせる機会がある事がとても嬉しい。

楽語を持つて、トニー先輩の後について舞台に出たら、ざわめきが広がった。

「おいパーカッション、ルール違反だぞ、一回も出るなんて!」クラリネットのトップ、パトリック・メイヤー先輩の野次が上がつて、観客席は笑いに包まれた。オーケストラでは、ソロ以外のピアノはパーカッションが受け持つ事が多い(ピアノも打鍵楽器と呼ばれる通り、広義には打楽器の一種)ので、ルー

ル違反、というわけだ。

「何を言うんだ、パトリック、カミュは今年からファゴットパートだぞ。今度の定演ではオルガンのファゴット・ストップで一アシをやるんだ」

トニー先輩が言い返して、僕の腕を引つ張り、僕は少しよろけた。一アシというのは、ファースト・アシスタント、つまりトップであるトニー先輩のアシスタントだ。

「な、カミュ?」

「え、ええ……そういう事にしておきます。でも、次のプログラムではオーボエパートにならなくちゃならないんですが」

「そうか、じゃあ、どっちもやれ。で、俺達は本番は吹いてるフリしてお前に全部任せる、と」

再び観客席が沸き、僕はお喋り好きなトニー先輩に引つ張られて、すっかり緊張が解けてしまった。ピアノの椅子に座り、Aの音でチューニングする。艶やかなファゴットの音がそれに重なる。客席が静まり返り、集中力が増す。一番緊張する瞬間だけれど、僕は、その緊張感が嫌いではない。

最初の二音を、なるべく優しく、澄んだ音で奏でた。先輩の音色に一番合う音を、僕なりに研究した結果だ。先輩は、練習の時よりずっと密度の高いピアノシモで、僕の音に滑り込むように入ってきた。

こういうアンサンブルが出来る時、僕は時も場所も忘れて興奮する。ピアノをやっていて良かったと、一番強く感じる瞬間でもある。実は結構アレ屋のトニー先輩は、ギリギリまで本気

を隠していたらしい。聴いた事がないような色気のある旋律を渡されて、こちらもゾクゾクした。

無事大きなミスもなく弾き終えて、大きな拍手の中、「聞いてませんよ、あんなの」とそつと耳打ちしたら、「お前は結構ああいいうアドリブ好きだろ? ちゃんとして来たし」とすつかり見透かされた返答を貰って、苦笑するしかなかった。

続くオーボエは、ラルフ・アトキンス先輩のソロだ。ラルフ先輩は初心者で入団してきたが、トニー先輩とパトリック先輩の猛特訓のお陰でとてもそうとは思えないほど音色の幅が広い。少々音色フエチなところがあつて、指回しより微妙な音のニュアンスに拘る。こちらも、どんな音を出せば良いのか、多少の研究を要した。ファゴット・ソナタほど絡みの多い曲ではないので、技術的に合わせるのは難しくないけれど、先輩の好みに合う音を出すのが難しかったのだ。

拍手喝采の中、最前列の新生活の中に、ラルフ先輩を見上げる憧れの眼差しを見て僕は無事勤めを終えた事にはっとした。多少、「ピアノがいい出来だった」という最上級生の野次も飛んでいたけれど、勿論そんなのは素直に「凄かった」と言えない先輩達の中からいに過ぎない。

ふと、視線の端に、ものすごい集中力で僕を見詰める視線に気付いた。思わずそちらを振り返り、次の瞬間、僕は背筋に冷水を浴びせられたような気分になった。

にこりともせず、厳しい表情で僕を睨んでいたのは、ヴァイオリン希望のジョシユア・ミラー少佐だったのだ。

続くトロンボーン、チューバのアンダンテ・カンタービレ、管楽隊有志によるオン・ブラ・マイ・フの二曲。僕はなかなか演奏に集中する事が出来なかった。ジョシユアの視線の意味が気になって、つい彼の姿に目がいつてしまふのだ。

ピアノ科の彼にしてみれば、僕のレベルで舞台上立つなど言語道断、という事なのかも知れない。あるいは、ミロが僕について事前に何か吹き込んでいたのか……

そう思い当たって、僕は暗澹とした気分になった。ミロの事だから、何か言うなら例の調子で褒めるだろう。ジョシユアが唯一認めたミロにそう言われて、何か僕に対して對抗意識を持った可能性もある。

あまり先走るのはよさう。まだ、ミロに確かめたわけでもないのだし……。

僕は、そう思い直して、一時ジョシユアの事を頭の隅から追い払った。プログラムは、管パートを全て終えて、次から弦になる。

弦の最初は、二年連続トップを勤めるシユラ先輩の無伴奏だ。シユラ先輩は、楽器をゆつくりと構えると、目を閉じてひとつ大きく深呼吸した。最初のG音が伸びる。それは透明に澄んで八角堂の隅々にまで広がり、後につづくアルペジオを支えた。バッハの名曲、チェロのための無伴奏組曲は、チェリストならば誰もが一度は弾いてみたいと思う曲だろう。特に第一番は技術的にそう難しいわけではない。けれど、この曲を美しく弾くのは並大抵のことではない……なまじ知名度がある故に、下

手な演奏をしてはかえって逆効果、と歴代のチェロのトップ達が意識的に避けて来た選曲だった。

先輩の弓は自在に弦の上を滑り、新人生ばかりか団員達も揃って溜息をついた。

本当に、今年の上級第六学年は名プレイヤーが揃っている、と実感する。団員達が、今年はいける、と自信を持つのも無理はない。

けれど、専科の人間の目で見れば、ここがスタートラインであり、全員が彼等のレベルになって初めてオーケストラだと認めるだろう。その厳しい専科の視線と、団員達の視線をどう近づけるか。ソリスト達の技量を見るにつけ、その問題が重くのしかかる。

つい、自分の思考に夢中になっていたら、途端に周囲がどよめきに包まれた。はっと顔を上げて、僕は、文字通りその場で硬直した。

何故、サガ先輩が、アイオロス先輩と一緒に出て来るんだ?! 次のプログラムは、ヴィオラとコントラバスのデュオの筈。もう一度プログラムを見て、再度顔を上げる。そして、サガ先輩の手にある楽器が、いつもより膨らんでいることに気付いた。あれは……アンドリユー先輩のヴィオラ!

途端に、心臓が痛いほどの強拍を打った。つまり、アンドリユー先輩は、ソロを代わってくれ、とサガ先輩に泣きついたのだ。いや、先輩の事だから、泣きつく素振りや、謀ったのかも知れない。

サガ先輩が、もう一度、アイオロス先輩と正面から向き合う機会を作るために。

心臓の強拍は一向に収まってくれず、僕は、耳元に自分の血流の音を聞いた。誰もが、息を飲んで、

痛い程の緊張感の中、アイオロス先輩の力強いベースの音と、サガ先輩の奏でる聞いた事もないうな心強いヴィオラの音が響き渡った。

ユニゾンで駆け上がる二人の音は寸分のずれもない。二人とも、やると決めたなら完璧主義なのは知っているけれど、これまで二人の間に厳然と存在していた目に見えぬ壁の気配は微塵もなく、サガ先輩が時折拍を見計らってアイオロス先輩に投げる視線には甘ささえ混じっている。アイオロス先輩の方も、指板だけでヴィオラの二倍はある楽器を操りながら、むしろ余裕さえ見せてヴィオラの音を支える。あまりに濃密なその空間に、僕は目を疑った。

これは、僕の方に先人観があるからなんだろうか？

二人の間にあるのは、とても友情と呼べるレベルのものじゃない。二人が決裂する以前にだって、これほど熱い駆け引きなどなかった。

それは、つまり、彼等が復縁した、ということだ。サガ先輩が今年五月に僕に語ったのとは全く違う未来を、彼等が選び取った、ということになる。

僕は、知らぬ間に握っていた両手に汗が滲んでいる事に気付いた。そんな事が、本当にあるだろうか？ アイオロス先輩な

ど、一度は外の女性と付き合っただけなのに……

思わず最上級生を見渡せば、皆同じ印象を共有していたらしい。シユラ先輩はいつもの通り苦い表情を隠さないが、トニー先輩やパトリック先輩達木管組は揃って苦笑していた。

「カミュ！ カミュ！ 聞いてくれよ、ヴィオラに三人も入ったんだよ!!」

懇親会が終わり、借りたテーブルと椅子の数の点検をしていると、ヴィオラの同級生ジェームズ・コリンズが殆ど涙を流さなばかりにして飛びついて来た。勧誘委員として日夜身を粉にして働いた末の三人だ。その喜びは想像に難くない。

「サガ先輩のお陰だよ！ 僕はほんとはアンドリュウ先輩のソロも聴きたかったけど……でもサガ先輩はやっぱ凄いや！」
「うん、本当に凄かったね。僕も、ヴィオラがあんな音を出せるなんて知らなかったよ」

ついヴィオラ弾きに対して失礼な返答をしてしまったが、ジェームズは気にする様子もなかった。今、ヴィオラパートの面々を怒らせるのは、シユラ先輩を笑わせる事の次くらいには難しいかも知れない。

その嬉しそうな笑顔に、彼は、あの空気に気付かなかったんだな、と思った。尤も、ジェームズは彼等がそういう関係だった事など知らないだろうから、当然と言えは当然かも知れない。「パーカッションも一人入ったんだろ？ おめでとー！」

「ああ……ちよつと、変わった子だけどね」

「フランツ、だっけ？ 僕の目の前にいたんだよ、彼。カミュがピアノ弾いてるのを、もの凄く集中力で見てもたからなあ。おいおい、メインはファゴットだよつてツツコミたくなるのを皆で我慢してんだ」

実は、パークッションの新生活は、マリンバのソロを勤めたジャック・ハドス先輩のチャルダッシュで入団を決めたのではなくて、僕のピアノで決断したらしい。彼自身ピアノが好きで、あんな風にオーケストラのメンバーとアンサンブルをやりたい、というのが入団の動機だった。

まあ、僕も、サンIIサーンスのオルガンにつられて入団したクチだから、人の事は言えないのだが。

手に四つもマメを作つて頑張つたジャック先輩の、ちよつと悲しそうな笑顔が忘れられなくて、僕は曖昧に、そうだったのか、と返した。

「でも、ちよつと、彼の気持ち分かるなあ。カミュつてさ、ピアノ弾くと別人になるよな？」

「別人？」

「うーん、なんて言うのかな、もの凄く大人っぽくなるというか……だつて、トニー先輩ともラルフ先輩とも、二年も離れてるなんて気がしなかつたからさ。うまい言葉が見つからないんだけど、もの凄くいい雰囲気？ ツーカーで何も言わなくても相手の事が分かる、みたいな。そういうのつて、なんかクールでカッコイイし、自分もあんな風にデュオやつてみたい、つて、

つい自分のレベル忘れて思つちやうんだよ。カミュのピアノつて、なんか、そういう魔力があるんだよな」

「……そうかな？」

「アンソニーも似たような事言つてたよ。あとウォルトも、カミュに伴奏頼んでみようかな、なんて」

ジェームズは、僕も、いつかもつと上手くなつたらよろしく！と言い残して、ヴィオラの一団の待つホールの入口へと走つていった。これから、アンドリユー先輩の部屋あたりで、打ち上げでもやるのかも知れない。まるでスキップでもしそうな足取りだった。

ピアノ弾くと別人、か。

僕は、ジェームズの言葉を心の中で反芻して、苦笑した。

ジェームズやアンソニー、ウォルトにも見えた変化。どうしてもそうなつてしまふ、というのでも勿論あるけれど、半分は、分かつていて、わざとやつてゐる部分もある。

僕は小さい頃から、自分の言いたい事を言うのが苦手だった。男ばかり三人兄弟の二男で、僕までが好きなことを言えば、母が困る、と幼いなりに分かつていたという事もある。

それでも、実のところ、それほど窮屈に感じた事はなかつた。母が音楽を教えてくれたからだ。

口では言えなくても、音で自分の感情を昇華することが出来る。と知つてから、むしろ、言葉で感情を表すことにあまり意味を感じなくなつた。どうせ言葉が感情を表す精度など知れている。それよりは、微妙な音のニュアンス、リズムのゆらぎや音

量の変化で表す方が、よほど自分の本心に近いと思えた。

その後、所属した合唱団でアルトのソリストに選ばれてソプラノとデュオを組む事が増え、共に音楽を共有することで、相手の心まで透けて見えるような一体感に夢中になった。

今もその瞬間への執着は変わらず、こうしてデュオの機会がある度に、僕はわざと相手の心の殻を引き剥がしにかかる。恥も外聞もなく、音に全てを晒してしまえ、と、音楽という免罪符のもとに、普段身の内に抱え込んでいるものを全て吐き出してしまいたくなるのだ。

トニー先輩も、ラルフ先輩も、去年デュオを組んだサガ先輩やポールは勿論、僕がいままでデュオを組んだ人は殆ど皆、僕のその挑発に乗ってくれた。それは、ただ僕の我慢に付き合ってくれた、というだけではなく、彼等にとつても、それがとても気持ちの良い事だったからだろうと思っている。

それが、唯一、通じなかつたのがミロだった。

ミロとデュオを組むのは楽しいけれど、曲は殆どがミロの趣味でピアノとヴァイオリンの掛け合いの少ない曲になる。趣味といったけれど、僕には、むしろミロがそういう絡みの多い曲を避けているように見える。

一度、どうしてもミロと音で会話をしたくて、ブラームスのヴァイオリンソナタ第一番「雨の歌」を一緒にやらなにか、ともちかけた。この曲は、ヴァイオリニストとピアニストが互いの音を自分のもののように聞き合って弾かなければ、その魅力が半減する。

ミロは僕の音による呼びかけに答えてくれようとはしたけれど、あまり気がのらなかつたらしく、結局三度ほど合わせただけで他の曲に興味を示し、それきりになってしまった。

ずつとヴァイオリンを一人で弾いて来たミロにとつて、音楽は、他人と共有するものではないのかも知れない。

そう理解してはいるけれど、他の友人には見えているのに、一番分かつて欲しい相手には伝わらない、というのはなかなか辛い。

一体ミロは、今日の僕と二人の先輩の演奏を聴いて、何かを感じてくれただろうか？

思わずそんな事を考えて、未だに未練がましいことを考えている自分に溜息が出た。

ミロにそんな態度があるのなら、自分がこんな未練を抱えてまでミロを諦める事はなかつたじゃないか、と。

借りた椅子の点検を済ませて、借用書の返却チェック欄にサインを入れたものをブラウン教官に提出し、スミス寮に戻ろうとした足がふと止まった。ヴァイオリンは、ジョシユアを含めて九名が入団した。結局、経験者はジョシユア以外には入らなかつたが、マンドリンをやつていたという少年が一人入った。

戻れば、ミロと今後の対策を考えなくてはならない。殆ど敵意のような視線をジョシユアから向けられたことを思い出し、気分が重く沈んだ。

今日は疲れた。もう暫く、人目を気にせず、一人で居たい。僕はそのまま八角堂に戻り、夕食も結局スキップして、ピア

ノを弾いて過ごした。そして、消灯の三十分前にスミス寮に戻り、その騒ぎを聞いたのだ。

「ロード・パーフェクトが激怒してるぞー！」
「え、マジ?！」

「バーでグラス叩き割つて、鼻息荒く首席室に飛び込んだんだと! しかも、そのあとをロスがもの凄いい形相で追いかけてつたらしい!」

私語嚴禁、走るな、と張り紙のされた、濃青色の絨毯の廊下をバタバタと複数の上級生が駆け抜ける光景に、僕は一瞬硬直した。ロード・パーフェクト、というのは、サガ先輩に付けられた渾名だ。サガ先輩が怒つた姿など誰も見た事がないし、ましてや怒りに任せて器物破損などするような人ではない。僕はそう咄嗟に胸の内で反論したが、あまりにも騒然とした寮内の様子が僕の期待を裏切っていた。

慌てて部屋に続く階段を駆け上がると、最上階の方で、何かを叩き壊すような音が二、三階聞こえた。三度目は明らかに何かが破壊された音で、その音の余韻も消えぬ間に、アイオロス先輩の怒声が降つて来た。

「お前が俺の何を知つて色憎魔なんぞ大した名前をくれるのか知らないが、俺に振り回された二年だとうふざけんのも大概にしろっ!! テメエが自分で出した答に俺が甘い顔見せなきや自分が被害者かつ?! テメエの思い通りに俺が動かかなけ

りや自分が悲劇の主人公かよ! いつもいつも人に何か働きかけられなきや動けねえテメエは、何様のつもりだ! え?! それは、お前が言った色憎魔つてやつよりよっぽど上等な人間なのかよっ!!」

思わず、足が止まって腰が砕けそうになったのは言うまでもない。

アイオロス先輩がそこまで怒りを爆発させる事も非常事態なら、サガ先輩がアイオロス先輩を色憎魔と断じたらしい、というのただことではない。この剣幕を聞いても、とても信じられるものではなかった。

一体何が、と手摺に縋つて階上を見上げたら、更に天変地異に相当する白詞が降つて来た。

「働きかけても、何を言つても答えないまま、逃げ続けたのは君の方だろう! そうして、一人で勝手に答えを出して、新しい彼女を見つけたんじゃないのか! なら何故その彼女を大切にしない?! 何故、壊れたからといって私の所に戻つて来るんだ?! 私は君の性欲の捌け口か?! 人を馬鹿にするのも大概にしてくれ!」

紛う事なき、サガ先輩の声だった……。

比喩ではなく、本当に頭が真っ白になった。あの、サガ先輩が……今季年を合わせても、誰よりも周囲に気を配り発言の重みを熟知している、と断言出来るあの人が、完全に我を忘れて

「カミュー! 何が起こつてるんだ?! 上で!」

同室の仲間達が心配になり、部屋に駆けつけると、丁度物音に驚いたミロが部屋から飛び出してきたところだった。その言葉に、僕はミロが先刻のサガ先輩の台詞を聞かなかつたのだと確信した。

「ミロ、部屋に戻れ」

「何でだよ！ あれ、サガの部屋の騒ぎじゃないのか?! なんか、扉が蹴破られるような、凄いやがたぞ！」

「そうだよ」

「だったら……！」

「喧嘩の相手はアイオロス先輩だ！ 僕等が安易に口出ししていい場面じゃない！」

こうしている間にも、またとんでもない応酬が聞こえて来るかもしれない。焦りから思わず、勢い余ってミロを怒鳴りつけてしまった。ミロは、一瞬、呆気にとられた表情で僕を見詰めた。

「……シユラ先輩が同じ階に居るんだ。アンドリュウ先輩も、他の最上級生もいるんだから、大事には至らない。二人共、相当頭が血が上っているらしい。僕等が首を突つ込めば、彼等の面目が丸潰れになる」

「そんな……。ロスが、サガに暴力を振るつてるのか?！」

「全く……。一体何をやってるんだ、あのバカ兄貴は！」

リアが頭を掻きむしりながら吐き捨て、僕を押しつけて先へ進もうとした。

「リア！ 駄目だ！」

「邪魔すんな！ 俺の兄貴だ！」

「兄でも此処では上級生だ！ 五年がしゃしゃり出て、シユラ先輩の顔を潰す気か！」

ラグビーで鍛えた肩から強く感じていた圧力が、ふと緩んだ。実際、現場を見たら一番衝撃を受けるのはアイオリアだろう。そもそも、二人の関係を知っているとは思えない。であれば、知らぬが幸せ、というものだ。

折しも、二階から様子を見ようとして来た五年生をアンドリュウ先輩が追い返している姿が目に入り、僕はほつと息をついた。

「らん。どのみち、僕等は入れてもらえないよ」

「当たり前だ……！ 模範となるべき最上級生が、こんな下級生の消灯後に騒ぎ起こしやがって……！ 下級生には見せられんだろうよ」

アイオリアはギリギリと轆轤りをしながら、階段を覗み付け、くそつ、と吐き捨てて部屋に戻った。ミロは階段の近くで多少なりと様子を伺いたい素振りを見せたが、サガ先輩が後で知つたら悲しむぞ、と釘を差して部屋に追いつ返した。

息詰まるような沈黙の中、普段ならベッドに入れば数分で寝息を立て始めるアイオリアもなかなか寝付く気配もなく、僕もミロも黙りこくつたまま翌日の数学の課題に取り組んだ。階上の騒ぎはそれきり聞こえなくなつたが、僕の耳には一人が叫んだ言葉が焼き付いていて、何度も再生を繰り返した。

ほんの数時間前には、あれほど濃密なデユオを披露したばかりだというのが、

一体、二人の間に何があつたのだろうか？

しかも、廊下で飛び交つていた上級生の声やアイオロス先輩の台詞から想像するに、先に爆發したのはサガ先輩であるらしい……

よほど、腹に据えかねる事があつたのだろう、と僕はサガ先輩に同情した。僕の視線がややサガ先輩寄りであることは十分分かつてはいるが、この春のアイオロス先輩のサガ先輩に対するあからさまな排斥は、何も知らない人間が見ても一方的に見えるはずだ。

それでも今学期に入つてからは、アイオロス先輩の底冷えするような冷たい視線と態度は見られなくなり、事態は改善に向かつて思つていたのに。

ふと、五月の「事件」を思い起こし、僕は暗澹とした気分になつた。チャイコフスキーの合奏で、サガ先輩はヴァイオリンが弾けなくなり、そのまま休団してしまつたのだ。

折角新人生が沢山入つたところだというのに、コンサート・マスターと学生指揮者という団の重要な地位にある二人の諍いが、団の空気を悪化させないだろうか。

僕の不安は、残念なことの中しだ。事情を知る者には隠しようのない緊張を孕んだ一週間が過ぎ、再び巡つてきた木曜の合奏で、サガ先輩はちらりとも学指揮のアイオロス先輩を見ようとせず、そのことに痺れを切らしたアイオロス先輩が突然学指揮を下りてしまつたのだ。

三

あまりにも事件の多すぎた九月が終わり、例年より少し肌寒い十月がやってきた。新人生達は寮生活にも慣れ始め、生活は落ち着きを取り戻しつつあつたけれど、交響楽団のざわついた空気は一向に静まる気配がなかつた。

「学指揮も十分大人げないけど、個人的な事情で指揮者を無視するコンサート・マスターは問題外だ。全く、くだらない。音楽以外の事でこんなに団全体が振り回されるなんて」

新人生歓迎会が終わり、仮入団の新人生達が正団員として迎えられた最初の月曜日。ミロが発起人の新人生合宿でブラームスの交響曲第三番のピアノデュオをやることになつた僕とジョシユアは、ロバートホールの練習室で最初の会わせをやるために待ち合わせていた。ジョシユアを説得したのはミロだったが、僕はこの自信にあふれる少年が専科の人間でもない僕とのデュオを承知したことに、少し驚いていた。

歓迎会でのあの冷たい視線もまだ記憶に生々しかったし、『何故僕が普通科の人間と』と、彼なら言いかねない、と思つていたので。

「ミロは、交響楽団には室内オケにはない良さがある、つて言つてたけど。今のところ、室内に勝るところは何もないよ」

練習室の前で僕より先に来てじりじりと待つていたジョシユアは、僕が練習室の鍵を開ける間、先日の交響楽団の騒動につ

いて辛口の批評を並べ立てる事に執心していた。あのウォルトが怒鳴り込んで来た日以来、ジョシユアの爆弾発言は一応影をひそめているが、これだけ文句を言えるのだから、決して不満がなくなつたわけではないのだから。

「まあ、室内ではこういう騒動は起きないだろうね。もつとも、うちのオケでもそうある事じゃない……僕もこんなのは見た事がないよ。君が話が違ふと思うも無理はない。僕自身は、彼等がそれほど長く団に迷惑をかけるとは思わないけど、愛想が尽きたというなら、入団を取り消すのは構わないよ」

この件については、確かに僕等第五学年が宣伝してきた内容と現実には食い違いがあり、僕はそのことを少し申し訳なくも感じていた。それで、半ば本気でそう言つたら、ジョシユアは唇の端を引き上げ、僕を見上げて「でも、未来のコンサート・マスターはどうするの？」と聞いて来た。

これには、少々驚いた。これまで、ジョシユアがコンサート・マスターの席に執着があるような素振りを見せた事はなかったからだ。

咄嗟に、僕は、しめた、と感じた。

「専科の課題をこなしながらオーケストラも続けるなんていうのは、並みの苦勞じゃ収まらない。しかも、君はコンサート・マスター候補だ。本当にうちのオーケストラを気に入つてくれているのでなければ、どのみち続かないよ。最終学年で匙を投げられるくらいなら、今やめてくれた方がいい。今ならまだ、パトリックを鍛えられるからね」

わざと、ジョシユアにそれほど興味がないような振りをする。パトリック、というのは今年ヴァイオリンに入った新入生、パトリック・ストラッキンのことだ。ヴァイオリンの経験者ではないが、ヴァイオリンと調弦が等しいマンドリンを弾いていたお陰で、左手の指回しは既に出来ていた。

「でもパトリックつて、マンドリンやつてただけだろ？ ヴァイオリンとは全然違うじゃないか。弓もないし」

果たして、ジョシユアは慌てて彼のライバルを否定し、あつさりとして、ジョシユアは慌てて彼の野心を露にした。なるほど、ボールの言う通り、ピアノの他にオーケストラでコンサート・マスターを勤めた、という肩書きもつけて、いずれば指揮者に、という将来設計でもあるのかも知れない。

ジョシユアにオーケストラに対する未練があるのなら、オーケストラと折り合いを付ける事も可能な筈だ。

僕はそう期待して、もう暫くこの興味をなさそうな演技を続けることにした。

「確かにそうだけど、パトリックには君にはない立派な長所がある。君が同学年を貶している間に、彼は一生懸命、楽譜の読めない学生に音階を教えていた。既に彼は、三年生の中で信頼を寄せられている……一方、君はその君の技術力を恐れられているだけだ。上級生は、君よりもパトリックの方が未来のコンサート・マスターとして適任だと思いは始めているよ」

椅子に腰掛けて、一部の上級生の間で囁かれている事を教えてやったら、勝ち気そうなジョシユア少年の眉根がぎゅつと寄

り、明らかに面白くない、という表情を見せた。

「ふん。じゃあ、ホントに僕がいなくてもいいんだ」

簡単に拗ねるあたり、口は達者でも矢張りまだ十三歳だなと実感する。同時に、そんな子供の言葉に振り回されている団員も少々大人げないのかもしれない、とふと思つた。

「そんな事はない。他の団員がやめてしまふのと同じくらい困るし、残念だ、というだけだ。でも君は、自分の意思で管弦楽団に入る事を選んだんだろう？ 先輩に何と思われても、それを簡単に曲げる性格には、僕には見えないけどね」

不意に、ジョシユア少年が顔を上げ、驚いたように僕を見た。正直に言えば、僕はミロほどジョシユアに対して楽観的ではないし、パトリックが入団してくれたことで、ジョシユアにはかり拘る必要もない、と思つている。けれど、ミロがあればほど執着する才能を、みすみす腐らせるのも惜しいと思つてもいい。

「さあ、時間が勿体ない。合わせませう」

ジョシユアが無言で頷き、椅子の高さを調整し始めた。

ブラームスの交響曲には、実は四曲全てにピアノ四手版の楽譜がある。後世の編曲ではなく、ブラームス本人の手によるものだ。新人生合宿で何かジョシユアと弾いて欲しい、と言われた時、即座に僕はブラームスがいい、と返答した。ブラームスの三番は、今年の定期演奏会のメインプログラムだ。ジョシユアがこれをどう解釈するのか、興味があつたからだ。

「テンポ、少し遅めで構わないかな？」

まだ指定のテンポでは弾けないので、そんな申し出をする、

以外にもまたあつざりとジョシユアはこれを飲んだ。

「じゃあ、先輩が拍子うつてよ」

ジョシユアが唇を引き結び、鍵盤に両手を置く。その瞬間、小さな練習室の空気が、ジョシユアの体に向かって凝縮するような緊張感を覚えた。

その集中力に、覚えがあつた。ミロが真剣に楽器を弾く時と同じだ。

舞台上の上の人間も、観客席の人間も、一瞬に引き込まれる。演奏家に絶対不可欠な吸引力。

一瞬、怖気づいた自分に驚いた。あまりに強い集中力は、共演者の気食つてしまう。僕は、自分が丸ごとこの小さな少年の気配に飲み込まれてしまったように感じたのだ。

いや、今は、そんな此事に捕われている場合じゃない……

最初の音を叩き出した瞬間、僕は、音楽の事以外の全てを頭から閉め出した。

殆ど無我夢中、といった状態で進行した練習音は三時間に及び、夕食の時間に大幅に食い込む時刻になって、僕等は漸くピアノの蓋を閉じた。外はすっかり日も落ち、他の練習室から聞こえていた音もいつの間にか止んでいる。

ミロの言葉は、正しかった。

ジョシユアの才能は、本物だ……

僕は、呆然と椅子に腰掛けたまま、ジョシユアに声をかけることもできずに居た。

ミロから連弾の依頼を受けたのが、丁度一週間前。ジョシユアにも、それほど練習する時間はなかつた筈なのに、彼は殆どミスタッチをしないレベルにまで仕上げていた。

こんなにも練習が長引いてしまったのは、僕がつかえて足を引つ張つたからだつたのだ。

「合わせられるのはあと二回？　ちよつと少ないような気もするけど……まあ、なんとかなるかな」

ジョシユアがぼつりと吹き、僕は、この自分より頭一つ分も小さな少年を全く同格に見ていた事に気付いた。

凄いな、と素直に感想を言う事すら出来ない。そんな年上の人間が後輩を褒めるような言葉は、とても出て来なかつた。

技術だけではない。音楽に対しても、ジョシユアの指摘はまったく的確だつたのだ。

無謬、比較的ダイナミックできらびやかな演奏を好むジョシユアと僕との間で意見が別れた部分もあつたが、お互い譲つた数はほぼ等しかつた。僕が譲つた部分は、僕自身の技術力の不足のために思いつかなかつたものが殆どで、言葉で言われてもわからず、ジョシユアが焦れたように「こんな感じ！」と音にするのを聴いて初めて理解した、といった有様だつた。

表現の幅は、技術力の幅を超えることはない。

そう思い知らされた事が、自分でも意外なほど痛かつた。

ジョシユアが自分の楽譜に今日打ち合させたテンポや強弱などを書き込む間、手帳を見て予定を確認する。来週日曜の午後

以外に、二人の予定が合いそうな時間はない。

「あとは、オーケストラの練習の後、一時間くらいならホールピアノが使えるはずだけど……でも、出来れば団員には本番まで秘密にしておきたい」

あと二回では少々心もとなひのは、こちらと同じだ。手帳から目を離さずそう返したら、「まあ、来週あわせて駄目さうだつたら、土日でもいいよ」と存外にフレンドリーな声が返つて来た。

一応、合格点は貰えたのか。

多少ほつとして顔を上げると、何か言いたげな、迷っているような視線がこちらを見ていた。

「……先輩」

暫くの沈黙の後、ジョシユアはさう口火を切つた。けれど、そのあとに続く言葉はない。

……一言、かな。

多少苦い思いで、けれど、ピアノに関しては彼の方が専門なのだから、と思ひ直して、尋ねた。

「……何？」

しかし、ジョシユアは答えない。よほど言いにくいことなのか、そんなに先輩風を吹かせたつもりはないのに、と考へて、練習前の会話を思い出す。十分、威圧的だつたかも知れない。

溜息とともに、苦笑が漏れた。

「僕のせいで随分遅くまで付き合わせてしまつて、悪かつた。何か、ピアノの事で言いたい事があるんだろう？　僕も至らないところは直したいから、気兼ねなく言ってもらえると嬉しい

のだけど」

なるべく柔らかい口調でそう言つてやると、ジョシユアは驚いたように僕の顔をじつと見詰め、うん、まあ、と曖昧な返事をした。

何か、予想していた反応と違つな、と思ひかけた時、ジョシユアが不意に僕の左腕の肘に触れた。そして、ピアノストの握力で、思い切り肘を掴まれた。

「……痛つ！」

思わず声を上げて肘を抑えた僕の前で、やつぱり、と溜息とともに声がする。

「こついうこと言つと、みんな生意気だつてすぐにシカトするから、あんまり言わないようにしてるんだけど……でも、先輩には言つよ」

少しむくれたような、それでいて少しだけ寂しそうな声に、僕は思わず顔を上げた。

「……先輩のブラームス。音の厚みを出そうとしてかなり肘に負担がかかつてる。本来肩で支える音を腕で弾いてるから。無理すると、多分近いうちに肘を壊すよ。本当はフォームから変えた方がいいけど、あと三週間じゃ間に合わないから、とりあえずもう少し楽に出すには、椅子の高さをもつと低くして、腕の重さを使うといいと思う」

練習室の鍵を返し、スミス寮への道を歩きながら、僕はジョ

シユアの言葉を反芻し続けた。ジョシユアの助言——腕の使い方に関して、正直返す言葉もなく、ただ短い礼を言うのがやつとの有様だつた。

実は、既に少し肘に痛みを感じ始めていたからだ。

本番までの時間がなく、つい練習時間が長くなりがちであつたこと、これまでいくつか弾いたブラームスのピアノ曲と異なり、交響曲のピアノ版ということもあつて、多少力が入り過ぎているのだろう、と、あまり深く考えもしなかつた。休みながらやれば問題なかつたし、それが自分のフォームの所為だとは気付かなかつたのだ。

一度練習を見ただけで問題を指摘してみせたジョシユアに、僕はそら恐ろしいものを感じ始めていた。我々普通科の学生にも、ピアノを弾く学生は多い。けれど、僕がそういう彼らを見ても、フォームの問題点を指摘することなど出来ない。

ジョシユアが優秀なのか、専科の人間というのはそういうものなのか……

そんな、自分との圧倒的な差に打ちのめされかけて、いや、違ふ、と思ひ直す。

ジョシユアは、「こついう事を言つと皆生意気だとシカトする」と言つたのだ。

それは、彼が、専科生や他のピアノストを目標す少年達の間でも抜きん出ていることを示す証に他ならなかつた。

……だからつて、僕との差が大きく開いていることに変わりはなけれど。

僕は、そんな事を思い、またジョシユアに嫉妬している自分に自己嫌悪した。

「遅いよカミュ！ みんな待ちくたびれて食っちゃったよ」

重い足取りでスミス寮に戻ると、ダイニング室の横から食器等を片付ける音に混じって、ミロの声が聞こえてきた。夕食の時間はほぼ終わり、あと十五分程度で食器も返さなくてはならない事に気付く。ミロが三列に並んだダイニング・テーブルの一番端に座って大きく手を振っていた。

「ほら、カミュの分もとつといた。感謝しろよな！」

「あ、ありがとう」

いやに上機嫌なミロの様子に多少気圧されながらテーブルにつくと、ミロも食わずに待っていてくれたらしい魚のフライにフォークを入れた。

「どうだった？ ジョシユア！ な、いいセンス持つてるだろう？ あいつ！」

つまりミロは、彼の秘蔵つ子のジョシユア少年の評価が気になって、仲間が食事するのにも混じらずに待っていた、ということらしい。その興奮したような、楽しそうな様子に思わず苦笑を覚えた。

ミロは、ジョシユアの才能に嫉妬しなかつたのだらうか、と一瞬考えて、その埒もない考えが自分でも可笑しかったのだ。「うん、流石に専科だね。技術力は確かだし、それを十分に使いこなすセンスもある。それなりに頑張って準備をしていったつもりだけど、早速足を引つ張ったよ」

「足引つ張ったって、カミュか？」

「うん」

「まさか！」

ミロは、飲みかけた牛乳のカップをわざわざ口から離して、そう笑った。

「そりゃ、あいつは指は回るかもしれないけど、ブラームスだろ？ カミュの方が絶対深い所まで音楽を理解してるよ！ あいつだつてそれは分かっているさ。カミュから学んだものは沢山あるだらうし」

僕は、ミロがそれを『太陽が東から上るのは当たり前』というのと同じくらい自然に口にしたことに、驚いた。

ミロは、ジョシユアのピアノに強烈な印象を持ったのではなかつたのか？

去年一年間、ミロと組んだ音楽の授業を思い出す。僕のピアノを、「上手だ」とは言ってくれるけど、僕が何度も「こちらの音を聞いて」と言わなければ一向に合わなかつたデユオ。

ミロから、彼がジョシユアを見つけて来た時ほどの興奮を、僕のピアノに感じたような素振りを見た事は一度もない。

唯一、ミロから感銘らしいものを感じたのは、まだ三年生の時、ミロにこっそり八角堂で練習していたピアノを聞かれてしまったときだけだ。

結局僕は、そのミロの言葉を、ミロの思い込みととつた。なにしろ、僕がミロにブラームスを聞かせたのはたつた二、三回弾いた雨の歌の伴奏だけだし、ミロから「深い所まで音楽を理

解している」などという立派すぎる評価を貰えるようなものは何も見せていない、と自信があつたからだ。

第一、ジョシユアの妻は、一緒に連弾した僕が一番よく知っている。彼の才能には、僕はとうてい及ばない……

「ミロ、君はジョシユアの才能を誰よりも認めている一人じゃないか。その君が、何故聴いた事もない彼のプログラムスが僕より理解が浅いと言えるんだ？」

思わず尖り気味になつてしまふようになる声を、必死で有めた。この胸に吹き荒れているものは、ミロに向けるべきものじゃない、ということは分かつていたし、何があつても、ミロにそんな無様な自分は見せたくなかつたからだ。

こういうときは、とにかく笑えばいいのだ。人に受けの良い笑顔を作る事に、僕は小さい頃から苦労したことはない。経験に従つて、僕はミロに笑顔を向けた。

「彼は僕等より二年も若いけれど、音楽のキャリアで言えば僕等より長い。僕等は皆、そのことを忘れていたんだと漸く気付いたよ。人を外見で判断してはいけないという好例だ。まあ、たしかにメンタリテイは年相応だけど……外見や年齢に惑わされて、彼の実力を低く見積もると色々なものを見誤る」

ミロは、やや呆氣にとられたように、右手にカップを持ったまま僕を見詰め返した。

「……ちよつと意外……カミュが、そんなにあいつの事を評価するなんて……」

「意外つてことはないだろう？ ジョシユアの事を認めたのは

君が先だし、僕は君の耳は最初から信用しているけど？」

「いや、そうだけども。確かに、あいつはピアノノ上手いし、音楽に対して真剣だし——なんか、たまに行き過ぎなくらい神聖視してるところもあるけどさ。でも、俺はやつぱり、カミュには敵わないと思つてるけど？」

思わず、フォークを持つている手が脱力して無作法な音を立てるのを心配するほど、力がぬけた。

今迄も何十回、いやもしかすると何百回も思つたかも知れない疑問を胸の内でも繰り返す。

一体、君は、僕の言葉を、どれだけ真面目に聴いていたんだ？ 「ミロ……」

咄嗟に返す言葉も見つからず、そこで口ごもつてしまったのをなんと勘違いしたのか、ミロはまた全開の笑顔でこちらの肩を叩いてきた。

「ジョシユアの音は綺麗だし、技術はまあ、もしかしたらそれこそキャリアの差であつちのが上かも知れないし、それを生かす音楽性もあると思うけど——あいつのは今んとこまだ、技術を生かすための音楽だ。ちよつとませてから、自分なりの色もつけてるのは凄いいけど。でも、カミュがあいつの年には、もう自分の音楽があつて、そのために技術を磨いてたじゃないか。出発点が違うよ」

本番が楽しみだな、とこの話にすつかり終止符を打つたつものミロに、僕は、違ふよ、と胸の中で吹き、今すぐにでもミロの目の前から姿を消してしまいたい衝動に駆られた。

ミロは、未だ、プロの世界を知らない。

父親がピアニストだというジョシユアは勿論、僕も、短い間ではあつたけれど、合唱の世界でプロと関わつた。

出発点がどうとか、そんな事は関係ないのだ。実際に生まれる音が全てであつて、そこに聴衆や批評家はその音の理由を当てはめては過ぎない。

技術がなければ、音楽に対する想像力が制限される。それをジョシユアは熟知しているから、あれほど厳しく技術を磨いているのだ。そしてそれが出来て初めて、自分の音楽の源が何なのか、という命題と正面から向き合う資格を得る。

でも、僕は、その厳しさに向き合う勇氣すらない。ポールだつて転科して本気で声楽科になる決意をしたのに、僕はその可能性を考へる事からさえ逃げてばかりいたのだから。

ミロが取りのけておいてくれた夕食を殆ど味も分らないまま全部片付けたあと、僕は結局ミロと共に自室に戻つた。

ミロの慰めを真に受ける事はできない。けれど少なくとも、彼本人は自分のピアノをそれなりにには気に入つてくれている。それはそれで幸せな事なのじゃないかと、そう思い直したからだつた。

それでも思わなければ、辛くて、自分が惨めで、とてもミロの顔など見れるものではなかつた。

第五学年の秋はとても忙しい。学習の進度は早くなり、課題

の量も一挙に増えるのに、新入生の世話から数ある行事まで、中心になつて動くのは常に五年生だ。第六学年が上級と下級に別れている事が示す通り、六年生というのは大学入学準備過程であつて、義務教育の範疇には入らない。そういう意味では、義務教育課程の最上級生である五年生がリーダーシップをとるのは理にかなつていて、ともいえる。

とはいえ、実際にハドスケジュールをこなす立場になつてみると、多少はこの学校のシステムを恨みたくもなる。特に今年は、ミロ発案の新入生歓迎合宿が入つたため、ハロウィンまで文字通り息継ぐ暇もないといった状態だつた。

自然、誰もが空き時間は自分の為に使うことに必死になる。談話室ひとつをとつても、去年までは結構談話室と一緒に騒いでいた人影がいくつか欠けている事に気付く。マイケル・ガーネットやウィリアム・バンキンは相変わらずだけれど、いつも話の輪の中心に居たエドモンド・ハウの姿はない。先学期末の試験で成績が落ち、夏は予定していた旅行も返上で家庭教師をつけられた、と本人も言つていたが、相当切羽詰まつた状況らしく、夜もひたすら自習している、と同室のパーマーが言つていた。

そのパーマーも、最近は図書室の常連だ。ウォルトも、あまり顔を見せなくなり、楽しそうに笑つている集団の比率は四年生や三年生が多くなつた。

僕自身は、正直、彼等に比べて学業に真剣に打ち込んでいるとは言ひ難い。ひとつには、合宿で演奏するブラームスの連弾

の練習にかなりの時間を割いていたこと、もうひとつは、ミロに教えてもらったとあるピアノリストに夢になつてしまつたことだ。

自習時間に、なんと一階下の教室から窓を伝つて図書室に忍び込んできたミロが持つて来たのは、ピアノとコントラバス、ドラムの三人組によるジャズのCDだった。僕はジャズピアノはあまり好みではなかつたが、周囲の目を盗みながら聞かせる暇はなく、そうしている間にヘッドホンから聞こえてきた音に呼吸が止まつた。

バツハの平均律、プレリユードの第一番。

この曲を、これほど楽しく、自在に弾けるなんて……！

原曲は美しいけれど、曲の構成自体は単調なアルペジオの繰り返しだ。それが、優しい音のせせらぎのようなアルペジオに始まり、それから一泊のほんの十分の一ほどの、聞こえるか聞こえないか分からないくらいのスイングを初め、自由なジャズの展開のあと、息もつかせないようなハイ・テンポのエンディングに突入する、文字通り何でもアリの一曲だった。

何でもアリなのに、まるでバツハ本人が書いたのではないかと思わせるほど自然で、無理がない。加えて、ピアノリストのジャック・ルーシェのテクニクが際立っている。所謂クラシックのピアノリストでも、これほど絶妙に音色やタッチ、リズムをコントロール出来る人は少ないだろう。

ジャズといえば、荒れたタッチとリズムの甘さがどうしても

馴染めなかつた僕にとつて、これはジャック・ルーシェという別ジャンルに置いてもいいと思えるほどの衝撃だった。ベースとドラムが、また出色の出来だ。絶対にバランスを壊さず、冷静さを保ちつつとても洒落た演奏をする。名前からして勿論フランスのトリオだが、ふと、祖母の家のあるモンマルトルの空気を思い出した。

その日の夜、僕はミロから改めて新人生合宿のためのもう一つの課題を貰うことになる。アイオロス先輩、シユラ先輩（なんとシユラ先輩はドラムも叩けると初めて知つた）と共に、ジャック・ルーシェ・トリオのコピーバンドを組む事になったのだ。

あれほどオーケストラを騒がせたアイオロス先輩は、あの破壊的なサガ先輩との喧嘩のあと、きつかり二週間後に、またサガ先輩との劇的な復縁を果たした。何がどうなつたのか、詳細は全く分からないが、サガ先輩はアイオロス先輩を許す事にしたのだろう。合奏を中断して最下学年だけの会合が開かれた後、再び団員の前に姿を表した先輩は、泣きはらしたウサギのような目で、それでもとても幸せそうに笑っていた。

再び意中の人の好意を得て機嫌が良かったのか、アイオロス先輩は二つ返事で快諾した。とミロは言つた。シユラ先輩も、ジャック・ルーシェならやつても良い、と自分から参加を申し出たらしい。この二人に合わせられるピアノといつたらカミュ以外に有り得ないとミロに力説され、この目も回る忙しさの中で、まだ更に一曲追加する余裕がどこにあるのか、と自問しつ

つも、結局あの水晶のような音を目指してみた、という欲求に耐えかねて承諾してしまつた。

自分でも、少々具合の悪い事になりつつある、という事実に気付いてはいた。ただでさえ、新人生勧誘で時間を使つてしまつたために、授業の予習、復習が少々疎かになつて少しずつ授業内容を積み残しが出来始めていたのだ。終わつたら、全力でその分を取り戻す。そう決めて打ち込んできたのに、その後も結局ピアノばかり弾いている。結局、将来の目標が定まつていないから、好きなことにばかり流れてしまふのだから、と思う。

そんなに好きなら、いつそそれを職業にするべきなのか、という疑問は、ポールが転料するという話をきいてから常に僕の頭にあつて、これまで努めて無視しようとしていたその問いに、僕は生まれて初めて真剣に向き合おうとしていた。ジョシユアと組んだ事で、専科に行かなければ学べないものがある、という事実を肌で感じたことも、大きなきつかけとなつた。

けれど、結論を言えば、僕はその道を選ばなかつた。その僅か二週間後、思いもよらなかつた事件の後から、僕の心は演奏家への道から少しづつ外れていつてしまつたのだ。

四

息が苦しい。こんなに呼吸をしているはずなのに、肺に穴が

開いているかのよりに、酸素が体に入つてこない。

馴染みのない息苦しさに苛まれて、目を開けた。窓の外は既に暗く、部屋の内側も明るい。しん、と静まり返つた部屋の窓の外で、微かに雨の降る音が聞こえた。

ああ、また降り出したのだな、と思つた瞬間に、全身の寒気を自覚した。

この感じからして、熱は三十九度五分程度か。耳元で、速く浅い流れるような脈が聞こえる。喉がまるでピンポン玉を飲み込んだように腫れていて、唾を飲むと痛みで全身が痠む。

扁桃腺炎による発熱だ。馬鹿なことをした、と自分の明方の愚行を後悔したが、こうなつては数日この熱と付き合うより他なかつた。

前日、僕はミロと楽譜を買いロンドンへ出た。成功に終わった新人生合宿でミロがジョシユアと弾いたルクレールがとても良かったので、ルクレールのソナタでもやつてみようか、ということになつたのだ。丁度十一月に入り、ミロの誕生日を祝う名目もあつて、楽譜を買つたら博物館見学でもして帰る予定だつた。

正直に言えば、今の僕にわざわざロンドンまで遊びに出る余裕はなかつた。学習に遅れがはじめているのに、まだ遊ぶつもりなのか、と気が咎めなかつたといえは嘘になる。けれど、ミロの誕生日を、どうしても何か特別なもので祝つてやりたかつた。自分とミロだけの間の記憶。下らない感傷と分かつていても、その他の感情はどうせ諦めたのだから、そのくらい手元

残したつて罰は当たらないだろう、と思つていた。

それが酷い思い違ひだつたことに気付かされたのは、大英博物館を出てチャリング・クロス駅に向かう途中のことだ。

路地の向こうに、忘れもしない四人組の姿があつた——鼻から耳へ、チェーンのピアスをした男と、その向こうに、片耳がひどくひきつれた大柄の男……ガイだ。四人は、薄汚れた煉瓦の壁を背に、街路樹の周りで煙草を吸つていた。

一瞬、甘つたるい焦げた匂いが記憶にフラッシュバックした。背筋が凍り付き、それから首筋に嫌な汗が吹き出した。

何故、彼等が、ロンドンに！

最初に浮かんだ言葉は、それだつた。

リーズの街で起きた事件。クイーンズベリの学生を狙つた恐喝事件の首謀者が、たつた一枚の写真から僕に目をつけた。連中の恐ろしさなど何も分かつていなかった僕は、無謀にもガイにつつかかり、捕まつた。

あれほど人を怖いと思つたことはない。他人の痛みを想像する機能が完全に欠落した人間が居るとすれば、多分ガイがそうだろう。他人を恐怖で支配するために、もつとも効率的な私刑の方法を淡々と考えている。そして、そんな男が、僕の姿に性的な興味を持つた事が一番怖かつた。

二度と使えないような不意打ちで何とか逃げ出してきたものの、もう一度捕まれば、恐らく五体満足ではいられないだろう。逃げなくては……！

意識がそう叫ぶのに、体はびくりとも動かなかつた。ミロが

僕の異常に気付いて四人組に視線を移し、それから、ぎりつ、と僕にも聞こえるほど激しい歯軋りをした。

まずい、と思つた瞬間に、漸く呪縛が解けた。僕の手をすり抜けて走り去る一瞬手前で、僕はミロの腕を掴む事に成功した。自分でも、どうしてあれだけの力が出たのか分からない。ただ、夢中で、ミロを近くの路地に引きずり込んだ。

それから何を言い合つたのか、もう覚えていない。気がつけばミロの体から力はぬけていて、僕等は薄汚れた路地裏に座り込んでいた。またミロが連中を追つて走り出さないよう、しっかりとミロの手を握り、彼等の視線を警戒しながら駅へ戻つた。何度後ろを振り返つてあとをつけられていない事を確認しても、何処か人気がない場所であつたのではないか、という恐怖は消えなかつた。

もう、これからずつと、外へ出る度に怯え続けなくてはならないのか……

僕は、漸く、自分のしかした事の重大さに気付いた。彼等はどこにでも出没する。クイーンズベリを一步出れば、安全な場所など何処にもないのだ。しかも、ガイの下にはまだいくらでも手下がいる。ガイがその気になれば、その手下に僕を探させる事も簡単に出来るだろう……

もう僕の事など忘れているだろう、と思う先から、あんなだまし討ちを食らわせた僕をそう簡単に許すはずがない、と恐怖がそれを塗り潰す。消灯時間が過ぎても、その堂々巡りから逃れられず、時間ばかりが過ぎていく。

何も、分かつていなかったんだ。

自分の浅薄さを悔やんで溜息をついたとき、ミロのベッドで、人が動く気配がした。ひたひたと床を襦足で歩く音が聞こえ、その人の気配は、僕のベッドの周りに巡らされたカーテンの向こうで跪いた。

「……落ち着いた？」

小さな、小さな囁き声が聞こえ、僕は、この明方の時刻までミロがずっと息を殺して僕の様子を伺っていた事を悟った。

ミロの所為ではないのに。ミロは僕と彼等の間に何があったのかすら知らないのに、どうしてそこまで僕のことを気にかけてくれるのだろう。

自分が弱っている時に、こういう優しさは危険だ、とはつきりと頭の中で声が聞こえた。けれど、所詮誰かに縋りたくてたまらなかつた僕に、何か行動を起こす事など出来なくて。

結局、目に見えない境界を踏み越えて来てくれたのは、ミロの方だった。

何をどう変換すれば、そんな言葉が出て来るのか、僕にはミロの思考の経路が全くわからない。けれど、それでも、辿り着く答えはいつも、それ以外には考えられないほど、決まって正しいのだ。

ミロは、僕自身でさえ認めようとしなかつた、僕の本当の希望をたつた一言で言い当て、それを実行した。

その後、呆気なく墮落して、結局一生隠し通すと決めていた

事件の顛末までミロに喋ってしまい、少々自己嫌悪も手伝って

頭を冷やすために外へ出たのが今朝のことだ。外は冷たい雨が降っていたけれど、何となく傘を差す気になれなくて、そのまま外に出た。頭が冷えたらすぐに寮に戻るつもりだったのに、前日から引きずっていた不安をどう自分の中で処理すればいいのか、考え込んでいるうちに気がついたら、三時間が過ぎていた。

日曜の朝は、教会のミサに参加することになっている。もともとは聖歌隊として参加していたのだが、今はまだ変声後のトレーニングの最中なので、専らオルガンの担当だ。

寮へ戻り朝食の時間が始まないと気が付いて、慌てて食堂に寄ると、思い切り眉を顰めたアイオリアにタオルを投げられ、追い返された。

「何やってんだ、そんなずぶ濡れで！ 席とつといてやるから、すぐに着替えてこい！」

前日は部屋に戻るなり、すぐにベッドに入ってしまったから、アイオリアにもきつと心配をかけただろう。リアは、それでも、そんな事はおくびにも出さず、こうしてさりげなく気を遣ってくれる。

時間がないので、服だけ着替えて乾いたタオルをとり、食堂へ向かうと、いい加減に雪を拭ってきた僕の顔を見てまたリアが「髪もきちんと乾かしてこいよ」と眉をしかめた。

その時に、素直に乾かしに戻っていれば、多分こんなことにはならなかつたのだろう。

ミサの途中で、急に寒気を感じた。上着を取れば問題なかつ

たのだが、オルガン席にいたために動けなかった。失敗したと気付いたのは、昔よく腫らした扁桃腺の痛みに気付いたときだった。

とにかく礼拝後すぐに部屋に戻って寝れば回復すると期待していたが、残念ながらそうはいかず、しかもこの暑苦しさからして、肺炎か気管支炎を起こしかけている可能性があった。

多少自分の状態を不安に感じ始めた頃、部屋の扉が遠慮がちに開き、アイオリアとミロが食事から戻って来た。僕は既に声が出せなくなっていたが、ミロが僕の顔を覗き込み、それからいきなり叫んだ。

「リア！ 明かり付けて！」

結局、一番一人に迷惑のかかる方法で僕は医務室へ移動し、メトロン（寮母）のミセス・ベルリッジからお小言を貰ってしまった。昼の段階で、何故来なかったのだ、というわけだ。

本当に、僕は何をやっているんだ。自業自得で、風邪をひいて、こんなに皆に迷惑をかけて。

自己嫌悪で気が滅入ったが、幸か不幸か、それについて真剣に悩むほど僕の体力は残されておらず、問答無用で飲まされた風邪薬のお陰で、僕はそのまま無意識の海に沈み込んだ。

次に気がついたのは、翌日の昼だった。熱は少し下がり、どうにも呼吸が出来ない辛さは一応落ち着いていた。ミセス・ベルリッジが、峠は越したようだ、と笑い、何か食べたいものはないか、と聞いてくれた。

「少しなら……。お粥か、スープがもしあれば」

「じゃあ、作って来ますから、寝て待っていなさいね」

ミセス・ベルリッジは僕の頭を一撫でして、奥のキッチンへ去っていった。

全てがスケジュール、規律に守られている寮生活の中で、唯一そうではない場所が、医務室だ。医務室でのメトロンとの関係は、可能な限り家庭での母親との関係に模される。眠りたければ好きなだけ眠ればいいし、何かが食べたいと言えば、出来る範囲ではあるけれど、その場で作って暖かいものを出してくれる。悩みがあれば、相談すればきちんと聞いてくれる。こういう時間が、欲しかったのかな。

意図したつもりはなくても、わざと風邪をひいたとしか説明のできない今の状況に、僕は漸く納得の出来る答えを見つけたような気がした。

多分、もう繕うのが嫌だったのだ。こちらから気付いてくれるよう意図したことは気付かないくせに、懸命に隠しているつもりなのに、事には驚くほど嗅覚が鋭いミロに、どう向かえばいいのかが。

ロンドンへ行った夜、ミロは、不良集団への恐怖に怯える僕を抱き締めてくれた。ミロは僕にそれをして、もう良いかと尋ね、僕は、まるで僕の方にはそんな気はないような返答をした。

「君がそうしたいなら」などと。

僕は、一昨日の会話を思い出して溜息をついた。

最低だ。本当は、ミロの体温が欲しくてたまらなかつた。そ

れなのに、僕はそれさえ認めず、気もない振りをした。ミロに全て責任がある、と言わんばかりに。

大体、抱き締めて欲しかったのはただ怖かったからだけじゃない。どう言い訳しても、結局僕は、また自分をか弱い生き物のであるかのように見せて、ミロの関心や同情を買おうとしたのだ。

二月のダンス大会の時のように……。

全身が、羞恥と自分への嫌悪で締め付けられるように感じた。あの時もそうだった。僕はミロと同級生で、親友という立場にあるのに、ドレスを来て女の子の格好をすることで、ミロに守りたい存在として見てもらいたかったのだ。

ミロは、一度守ると決めた相手のことは全身全霊で抱え込む。そんなミロの責任感を、僕は利用しようとした。いつかミロのたった一人の女性が立つであろう場所に、一時の真似事でもいいから、自分も立ちたかったのだ。

お前などに、ミロの親友面をする資格はない。

そんな声が、自分の内側から聞こえた。

だって、今も肌に残っているように感じるのだ。ミロがしっかりと抱き締めてくれた、思いがけず強かった腕の感触も、その時の体温も、ふわっと首筋から漂ったすこし柑橘系の香りのするミロの匂いも。

こんなこと、僕がミロ以外の相手から勝手に何度も思い返されていたら、きつとおぞましさに身震いするだろう。

ミロが見せてくれた柔らかな好意が、僕の記憶の中で勝手に

歪められて、今もミロへの侮辱を繰り返している。こんな記憶は今すぐ消去してしまわなければミロに失礼だ、と分かっているのに、一番近くに居て欲しい人に力を込めて守るように囲われた感覚は、脳髓が痺れるように甘くて、手放せない。

天井を見詰めていた視界がじんわりとほやけて、僕は両目を右手で覆った。

ミセス・ペルリッジが作ってくれたオートミールのお粥と、野菜の沢山入ったスープを一時聞くらいかけて漸く食べて、僕はまた暫く眠った。翌日からは、毎日ミロが誰かしらを連れて見舞いに来てくれて、数学と物理のノートを渡してくれた。

僕の扁桃腺の腫れはほぼいつもと同じ速度で収束し、一週間後には、僕は晴れて共同部屋に戻れる事になった。体重は四ポンドほど減っていたが、時間を気にせず色々と考え事をする時間が持てたことで、あれほど怖かった不良集団の事もそれほど気にならなくなっていた。

ミロは、やつぱりあの夜のことがかつかかっているのか、僕が医務室に籠っていた間中あまり僕と喋ろうとはしなかった。無理もない。僕だって、明るい光の中で思い出せば、あの一件は頬に血が上るように感じるのに、僕はそれをすべてミロ一人の責任にしてしまったのだから。

ミロは、彼しか持ち得ない敏感さで、僕の希望を汲んでくれただけだというのに……。

その、ミロの困つたよみ拳動を見て、漸く諦めがついた。

あの夜の事は、なかつたものとして振る舞おう。そうすれば、きつとミロの居心地の悪さも、そのうち消えてゆくだろうから。折角のミロの誕生日を台無しにしてしまったこと、きちんと謝ろう。それで、この件は終わりだ。

そう決めて、新しい気持ちで部屋に戻つた翌日、僕は今迄とは全く違つたミロの姿に愕然としたのだ。

「はい、一列に並んで！ チューニング終わつた人は、音だしは控えめに！ 管で終わつたパートがあつたら、チューナーを弦にまわしてくれ！」

一週間ぶりに参加した交響楽団の練習日、僕は八角堂に入るなり今迄見た事もないような光景に目を見張つた。

本番迄一ヶ月を切り、これから練習はほぼ毎回合奏になる。その切羽詰まつた時期に、なんと団員全員が、チューナーの前に一列に並んで一人ずつチューニングをしているのだ。

「あ、先輩、風邪はもういいんですか？」

今年入団したパーカッションの後輩、フランツ・ウェルナーが僕の顔を見るなり駆け寄つて来て、挨拶をしてくれた。「うん、迷惑かけたね。代打ちありがとう。ところで、これは一体……」

新人生ばかりでなく、四年生や一部の五年生までも四苦八苦しながらチューナーを腕み付けている。その一種異様な光景から目が離せないまま、僕はフランツにそう聞いた。

「ああ、さつきシユラ先輩から通達があつて。なんでも、チューニングが合っていないと合奏でも音が合わないから、全員自己流に頼らず、ちゃんとチューナーで合わせることにしたさうです。でも、なんかすごい時間かかつてますけど。最初にミロ先輩がやり始めて、僕等三年生は殆ど終わつてたんですけどね、これでも」

「えつ……ミロが？」

「ええ、僕が来たときはミロ先輩がやつてました」

やつぱり自分で調律する楽器は大変だな、とフランツが呟くの聞きながら、僕は違つ、と直感した。

こんな原始的な方法が、シユラ先輩の発案であるはずがない。言い出したのは、多分ミロだ。

原始的だけれど、多分、今の僕等に一番必要なことだ……

ひたすら響くAの音を聞きながら、僕は、その真つ直ぐな思考にまたもや打ちのめされた。

音が汚い、合っていない、と口で言うのは簡単だ。合わせろ、と言うのも、的確な指摘に聞こえるけれど、決してそんなことはない。

僕等素人の集団は、まづ音の合つた状態が分からないのだ。耳ができていないから、合わせろと言われて注意されても、分からぬ。出来ない事を注意されても、「努力します」としか言えない。

良い響きを知る耳をつくるには時間がかかる。今から、一ヶ月もない本番に合わせるのは到底無理だ。それでも、チュー

ナーという機械の力を借りる事で、全ての楽器の基音を合わせることが出来る。基音がしつかり合っていれば、そのほかの音がずれる割合も減る。

上級生も下級生もひつくるめて、全員にチューナーの使用を義務づけるのは、それなりに経験を積んで自信のあるプレイヤーには侮辱に感じられるに違いない。それでもそれを要求するのは、そういう独りよがりやを許さず、全体で一つの音を造るのだ、という信念のためだ。個人のプレイヤーではなく、徹底的に全体のために個を捨て、それが出来るのは、専科の人間が集まる室内管弦楽団ではなく、素人の集団である交響楽団だ——僕には、それが、そんな決意表明のように思えた。

大体、こんな方法、効率を考える人間は絶対に考えない。精々、上級生をきちんと合わせて、その上級生が下級生のチューニングの面倒を見る、とかその程度だ。一人一人を全員、チューナーを見ながら合わせるなんて、そこまで徹底したことを考えるのはミロくらいしか思いつかない。

「あ、カミュー！ バーカッションも、抜かり無く頼むよ！」
ミロが僕に気付いて手を振り、僕も「わかった」と手を挙げた。

ここは、呆れる場面なんだろうか。
ヴァイオリンパートのチューニングを見ているミロを眺めながら、そう自分に問いかけてみる。

きつと、マックスやウォルトなら、よくやるよ、と溜息をつく所なのだろうし、僕も意見を聞かれればうっかりそう言うて

しまっかもしれない。

でも、本当は分かっている。ミロには、敵わない、と、こういう彼の姿を見る度にそう思うのだ。それは、ほんの少し苦いものも感じさせるけれど、それよりずっと、自分が正しいと思う事をきちんと周囲に理解させた上で行動に移すようになったミロの成長が、僕は心から嬉しかった。

チューニングに時間をとったおかげで三十分遅れて始まった練習は、夕食の時間に食い込む形で終わり、僕は先に食堂へ行って五年生の人数分の夕食を確保する役目を仰せつかった。夕食は勿論人数分以上用意されているのだけれど、あまり遅く行くと何故かなくなってしまう料理がいくらかあつて、山盛りの豆だの芋だのを胃をふくらませることになるからだ。

楽器を自分の部屋まで戻って置いて来たミロが一番最後にテールにつき、今日の練習についての話になった。

「毎回こんなに遅れちゃ敵わないな」

「いや、次回からは練習前に合わせておくように、つてシユラ先輩は言つてたよ」

マックスの不平にアンソニーが答えた。勿論、そうあるべきだろうが、それは団員に練習の四十五分前には練習場に来い、というのにはほぼ等しい。チューナーは追加購入することになつたけれど、納品にはまだ時間がかかるし、それまでは今あるチューナーで全員合わせなくてはならないからだ。

でも、それだつてどれだけ時間がかかるんだよ、とマックス

がタンドリリー・チキンを頬張りながら、ほやき、アンソニーもそうだよ、と溜息をついた。

彼等は、多分これがミロの発案だと知らないのだろう。ミロはどんな思いで彼等の言葉を聞いているだろう、と思つたら、そのミロがテーブルの上に身を乗り出した。

「でもさ、チューニングちゃんと合わせておくだけでも、ずっと音程がよくなるぜ?」

「……はあ?」

「いや、実は俺、今、頼まれて専科の授業オケのエキストラやつてるんだけどさ、チューニング狂い始めると、指揮者がしつこくチューニングやり直させるんだ。で、たしかに、チューニングが合うと、そんなに苦労しなくてもちゃんと音が合うんだ」突然、思いがけない話を始めたミロに、その場の全員がナイフとフォークを止めた。ミロが専科の授業に参加しているなど、初耳だ。先週医務室に籠り切りだった僕でなくともそとでであったろう事は、その場の仲間達の大きく開いたまま固まつた口を見れば分かる。

「ミロ、専科の授業オケ、つて、いつの間に……!」

僕がそう訊くと、ミロはちよつと居心地悪そうに、「いや、実はジョシユアに頼まれて、先週から。あいつに文句はうちのオケで弾いてから言え、とか言つた手前、断れなくてさ」とはにかんだ。

「マジかよ! 大丈夫か? お前、そんな暇あんの? 曲は?」

真つ先に硬直から復帰したのは、マックスだった。

「……ストラビンスキーの、春の祭典」

「何つ……『春祭』?! 滅茶苦茶難しいだらろ!」

「うん……かなり必死で練習してるよ」

「バツカだなあ……! まあ、お前弾けるから、なんとかなるかもだけだな……!」

マックスとウォルトが交互にミロに詰め寄る間、僕は何も言えずに、ただ果然とそのやりとりを聞いていた。

ミロが、専科の集団に混じつて、ヴァイオリンを弾いている……?」

あれほど、自分が弾ける事を他人に見せる事を嫌がつていたミロが?

一瞬全ての音が遠のいて、自分の内の声だけが頭の中に響いた。何か、凄い事を聞いた、と思うのに、実感が湧かない。その時、ミロの「指揮者は優しいんだけど、コンマスが厳しいんだ」という声が聞こえてきて、その瞬間に、まるで止まつていた水が流れるように僕は全てを理解した。

ミロが、音楽でしるぎを削る専科の集団に混じり、彼等から学んでいる!

そう思つた瞬間、何か熱くて息苦しいものが、急速に胸に膨れ上がった。

これまで、ミロはともによく弾けるくせにそれを表に出すことを躊躇し続けていた。聴衆もない、たった二人だけのプライベートな練習でさえ、少し音楽にのめり込み過ぎたと感じるとそれをまるで罪悪でもあるかのように恥じていた。

専科は、そんな奏者の照れを許してくれるような甘い集団ではない。その中で、あんなシャイな態度がとれるはずもないから、きつと本気で弾いているのだろう。

本気でヴァイオリンを弾く、ミロの姿が見たい。

一番大事な事ほど言葉にしないミロの、心の声が聞きたい。その姿を想像するだけで、自分がそこへ混じる事を考えるより何倍も興奮した。

一体、僕が医務室で痔の無い思考の堂々巡りを繰り返していた間に、ミロは一体どこまで先に進んでしまったのだろうか？

その場はまだチューニングの話題が続いていたけれど、僕は最早それを真面目に聞く余裕もなく、ミロがどうしてそれほど急に積極的になったのかをずつと考えていた。

やはり、ジョシユアから良い刺激を受けたのだろうか？ 専科の授業はどんな感じなのか？

聞きたい事が一杯に膨れ上がる。でも今質問したら、他の仲間達の事など考える余裕もなく、きつとミロを僕一人が占領するような形になってしまおうだろう。

僕は、何とかしてミロと二人で話す機会を作りたいと思つた。この間の誕生日の事も、謝らなければならぬし……

と、その時、ルクレールの事を思い出した。そうだ、二人になれる格好の機会があるじゃないか！

話はチューニングからいつのまにか調性の話題に移行していて、チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲が何調かも知らなかったミロは、ウォルトやマックス、アンソニーにまで呆れら

れて少しむくれていた。

食事の後、食器を返しながらその話題を情性で続けていた僕は、ルクレールのことを思い出して、逸る気持ちを抑えてミロに予定を尋ねた。

「ところで、今手く話は変わるけど、明日の午後は忙しい？」

けれど、急に明日の予定など聞かれたミロは、予想外の質問に窮したらしかった。

「うん……。あの、先週からオレ、選科の授業オケにエキストラで参加してると言つたじゃん？ で、その練習が、明日なんだ……。でも、何か大事な事とか、ヘルプが必要な事だったら、いくらでも時間作るから……！」

そのミロの申し訳なきような声に、僕は舞い上がった気持ちで急激に縮こまったのを感じた。授業オーケストラの曲目は「春の祭典」。あの難曲を、エキストラとして遅れて参加して弾くのに、ミロに他に脇目をふる時間などあるはずがない。

「ああ、ごめん、大事なことじゃないんだ。……その、ルクレールの譚説みをやらないか、と思つただけだから。また別の機会にしよう。毎週水曜は授業オーケストラの練習日なのか？」

馬鹿なことを聞いてしまったと焦つて、特に聞くつもりもなかった事を聞いてしまい、これでは別の曜日ならいいのか、と暗に尋ねているようだと思つて更に焦る。案の定、ミロはとてつもないくそうに、授業オーケストラの日程を教えてくださいました。

「うん……。あの一応授業の一環だから、月・水・金とやって……。その後もちよつと遅れて始めた分その練習とか……」

火、木、土は交響楽団の練習があるから、実質一週間全て何かしらで埋まっていることになる。マックスでなくとも「大丈夫か」と聞きたくなるような過密スケジュールだ。

専科の授業と、交響楽団で毎日楽器を弾くミロ。まるで、専科生のようだ。

さつきまで、そのことをとても嬉しく思っていたのに、その場に自分が居ることは出来ないのだ、と思つた瞬間、夢から醒めたような衝撃を感じた。

ミロは、どんだん先に進んでいる。一方、僕は、ずっと一カ所に留まつたままだ……。

「いや、勿論、そちらを優先すべきだよ。別に急ぐことじやないし、本番が終わつてからでも構わないから」

慌ててその念をおして、ミロが罪悪感を感じない事を祈つた。ふと、今学期始まつたばかりの頃、ミロにデュオの誘いを受けた時のことを思い出した。

あのときは、自分の方が忙しくて断つたのに。

ミロが、楽器を弾くのが忙しくてデュオの誘いを断る日があるなんて、ほんの数ヶ月前には考えもしなかった、と気付いて、僕は暫く言葉も出なかった。

翌日の水曜日、僕は一人、部屋でプレゼンテーションの原稿を書いていた。先週出されたフランス語の課題で、期限は来週の月曜日だったけれど、ルクレールのためにあけておいた時間

が空いたので、早めに済ませることにしたのだ。

課題は、将来つきたい職業について調べ紹介するというものだ。進路を決める年になって、お互い仲間同士で興味のある職業についての情報交換もする、という意図がよく見える課題だったが、既に将来何になるかを決めている人はクラスの半分ほどで、僕は勿論残り半分のうちの一人だった。

理系か文系かと言われれば、勿論理系だと答える。実は成績は文系科目の方が僅かに上回っているのだけれど、あまり将来文系の仕事に就く気はしない。父のように銀行員、というのも数年で飽きそうだし、会社でマーケティングや商品企画を練つたりする事も、やれば出来るだろうがあまり乗り気がしない。漠然と、やるなら何かを造る仕事か、研究職が良い、と思つていた。

あるいは、演奏家か……。

ピアノのことは、ここ二ヶ月、少し真面目に考えるようになっていた。やはりポールが転科を決めたというのは衝撃だったし、年下の少年に水を開けられた意地でもなんでも、ジョシュアのように自在に様々な音色を弾き分けてみたい、という希望もあつたからだ。

けれど、ポールに倣つて、同学年のピアノ科の学生がどんな曲を練習しているのか、少しリサーチを始めたところで、これは相当に難しい、と考えるようになった。

僕が授業で弾いていた所謂3B（バッハ、ベートーヴェン、ブラームス）、ショパンのソナタやワルツ、といった曲は四年